

〈論文〉

今日の経済学と戦士ヨブの潔白な誓い

—— 義人ヨブとヨブの悔い改めおよび今日の経済学 ——

Modern Economics and His Oaths for Guiltlessness as Solidier Job

—— Innocent Job and His Repentance, and Modern Economics ——

久保田 義 弘

本稿の要旨

本稿の第1節から第5節において、義人ヨブの潔白な誓いの含意を、『聖書』の『ヨブ記』のヨブの言葉、およびヨブと三友人の問答あるいは返答から明らかにする。さらに、本稿第7節では、ヨブ自身が無知であることを知り、自身の罪を懺悔し、自分を捨て、神に自身をまかせることによって、神は、ヨブが全き人として受け入れたことを確認し、三友人との問答ではヨブが正しい事を神について述べていることを確認する。その結果、神はヨブの祈りを受け入れる。さらに、本稿の第6節において、今日の経済学の消費者の倫理や行動がヨブの12項目の潔白な誓いと必ずしも不整合ではないことを示す。

第一に戦士ヨブならびにエラスムスが悪徳として日常生活で忌避することを説いている好色問題を今日の経済学において表現する。好色は個人的には効用を高めるが、他方では、個人的な好色費用ならびに好色の社会的費用を生みだし、むしろ個人の効用を低くする可能性があることを示す。第二に食欲の問題を考察する。これは、今日の経済学では、富（あるいは財産）が個人の効用水準を引き上げるかどうかの問題である。効用水準に飽和点が存在するならば、富の増加はむしろ効用水準を引き下げられるかも知れないことを示す。さらに、これに関連して、富が友達を増やし、個人の効用水準を引き上げると言う見解について考察する。ここではこの見解について疑問を提示する。第三に奴隷の権利を無視することに関わる問題を取り上げる。ここでは、奴隷は労働力として位置づけ、奴隷の権利を聞き入れることは、労働者の待遇の問題に帰着する。

第四に貧者に対する無情の問題あるいは客人への非情の問題について考察する。この問題は、食物に事欠くとき、あるいは貧者（孤児、あるいは客人）に住む家がなく、泊まる宿がなく、着るものがないときに、主食のご飯やパンを与え、その貧者（孤児あるいは客人）に雨露をしのげるように家屋、着るものを、および食事を提供することは、一種の移転（所得移転）の問題である。移転を行う人には、何の見返りもなく、財やサービスを他の市民に提

供することになるが、これは今日の市民社会の現象になっている。社会保障に関連した支出・収入の問題として今日の経済学では扱われる。

第五に敵に対する憎しみの問題について検討する。これは利他主義と今日の経済学でも取り上げられる課題である。個人の効用水準が他人の効用水準に影響される問題である。他人の効用水準が上昇すると、その個人の効用水準も引き上げられることになる。第六に畠の濫用問題を考察する。これは土地の生産性の維持・向上の問題であり、今日の経済学では生産関数において扱われる問題である。

なお、ヨブの誓いの第八の迷信問題は科学（社会科学）と宗教の闘争問題として考察する。また、その第十の罪の隠蔽問題と第二の虚偽問題は、交渉問題や神学問題として考察されることになるが、別の機会に取り上げるが適切であろう。

キーワード：戦士ヨブ、ヨブの潔白の誓い、好色問題、貪欲問題、貧者に対する無情の問題、客人への非情の問題、敵に対する憎しみの問題、畠の濫用問題

はじめに

エラスムスは、「人間の生活は、まことに厳しい試練を経て不屈となった戦士ヨブが証人となっているように、不断の戦闘以外のなにものでもないということ、またその心を現世という手品師が魅惑する玩具で捕らえて占領している人々の大群は、もう戦いが済んだも同然となり、その時ではないのに休日を祝い、全く平和を確信しきっていますが、彼らのはなはだしくあざむかれていることをも記憶しておかねばならないのです」¹と語り、「この世」での人間生活は、戦士ヨブを証人としてみているように、不断の戦闘である、とエラスムスは考えている。多くの人々は、現世に魅了されて、戦いが済み平和であると確信しているが、これらの人々が欺かれていることをエラスムスは見抜いている。人々の日常生活には、「邪悪きわまる悪魔」²が彼らを「破壊させようとして上から絶えず見張って警戒している」³のであって、現世（「この世」）は、決して全く平和ではない、とエラスムスは認識している。「この世」の悪魔たちは、「多くのたくらみをもって、また千もの破壊の技術でもって私たちに對し武装」⁴しており、彼らは「私たちの精神」⁵を「毒を盛った投槍」⁶でもって、「刺し通そうとして

¹ エラスムス（金子春男訳）『エンキリディオン』8ページから引用。ホイジンガー（宮崎信彦訳）『エラスムス』（第6章 神学への志向）（59ページ上段参照）によると、エンキリディオンはギリシャ語（Enchiridion）であり、これには短剣と教本の二つの意味があった。この文献では、『エンキリディオン』は、『戦うキリスト者の戦士』と訳されている。

² 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）8ページ9行目。

³ 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）8ページ9行目。

⁴ 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）8ページ10行目。

いる』⁷とエラスムスは説いている。ここでは、ヨブを戦士としている。本稿の表題には、このエラスムスの見解（戦士ヨブ）を使用している。

また、エラスムスは、『エンキリディオ』(第18章、第八教則)において、「神の友ヨブのことを思ってみよ。ヒエロニムス、ベネディクトゥス、フランチェスコおよびこの人たちとともに最大の悪徳により悩まされた他の無数の神父たちのことを思ってみなさい」⁸と言う。エラスムスはヨブを神の友と位置づけている。本稿では、その神の友とエラスムスをして言わしめているヨブを通して、経済生活におけるヨブの見解を考察・検討する。

本稿では、戦士ヨブの神との応酬によって、義人ヨブが悔い改めるプロセスを見ていく。それと併せて、経済学の理論分析において前提とされる個人の行動と義人ヨブの倫理（潔白の誓い）との関係を考察・検討する。これが本稿の第一の問題である。経済学の効用関数や生産関数との関係でヨブの生活を考察・検討する。本稿の第二の問題は、エラスムスの『エンキリディオ』(『戦うキリスト者の短剣』、あるいは『キリスト教兵士提要』)における教則(第一から二十二の教則)を参考にし、あるいは『聖書』によって、義人ヨブの「悔い改め」を検討する。

本稿は、第1節から第7節で構成される。第1節では、ヨブという人物を紹介し、第2節では、ヨブの試練とサタンの問題提起について説明する。第3節では、ヨブの嘆きと三友人の慰めと第一の応答において、ヨブの苦しみが三友人にどのように理解されているかを見る。第4節では、ヨブの三友人に対する反撃とヨブに対する呼びかけについてみる。第5節では、ヨブの確信では、ヨブが潔白であることを見る。第6節では、ヨブの誓いについてとその経済学の立場からの解説を行い、ここで提示される倫理問題がどのように経済学で扱うことができるかを考察・検討する。第7節では、戦士ヨブと神との応酬、さらにヨブの悔いあらためについて説明する。

エラスムスは、前掲書『エンキリディオ』において、知識、健康、天賦の才能、雄弁、美貌、強壯、地位、寵愛、権勢、繁栄、名声(名譽)、家柄、友人、家財などを「中間的もの」としている。この中で、知識を第一位に置き⁹、次に、健康、天賦の才能、雄弁、美貌、強壯、地位、寵愛、権勢、繁栄、名声、家柄、友人、家財を位置づけている¹⁰。「これらが徳への最短の道に役立つ限り¹¹」において、それらを利用されなければならないとしている。

⁵ 前掲書『エンキリディオ』第2章(人生においては警戒すべきである)8ページ10行目。

⁶ 前掲書『エンキリディオ』第2章(人生においては警戒すべきである)8ページ11行目。

⁷ 前掲書『エンキリディオ』第2章(人生においては警戒すべきである)8ページ11行目。

⁸ 前掲書『エンキリディオ』第18章(第八教則)143ページ9行目から11行目。

⁹ 前掲書『エンキリディオ』第13章(第四教則)71ページ18行目。

¹⁰ 前掲書『エンキリディオ』第13章(第四教則)71ページ19行目から20行目参照。

¹¹ 前掲書『エンキリディオ』第13章(第四教則)71ページ末から72ページ1行目。

「これらのものを手に入れても、得意にならず」¹²、またそれらのものが「取り去られ奪われても心中で仰天することもない」¹³。すなわち、それらものに気をとられることなく「熱意をもって唯一の目的であるキリストに向かって登ろうと努め」¹⁴なければならない、とエラスムスは言う。

しかし、エラスムスは、この「中間的なもの」に止まることを拒否している。エラスムスは、「中間的なものを最高のことのように、まるで価値のないものを最高価値のように考える」¹⁵ことに我慢していない。エラスムスは、「中間的なもの」に止まることなく、「悪徳への嫌悪とともに徳への愛を増大」¹⁶するように祈ることを説いている。たとえば、健康を与えられるようにと祈るが、その健康が悪用されるならば、その祈りは敬虔なことではなく、不敬虔になる。すなわち、健康な人が窃盗するなら、健康を神（聖人）に祈ることは不敬虔になる。また富が獲られますようにと祈るが、その使い道を知らないと、それは自身の破滅を祈ることになる。

義人ヨブは、エラスムスの言う「中間的なもの」に止まることなく、全身全霊をかけて神に向かい、直接的に神と話し合うことを求め、自身の義についての神の判定・裁きを求め訴えている。以下で、第1節から第5節において、ヨブが激しく神に頼る心の動きを検討する。そして、第6節においてヨブの潔白な誓いを今日の経済学の観点から解説する。最後に、第7節において、戦士ヨブが神に挑戦し、神の全知とその全能者としての神に圧倒され、沈黙し、悔い改めるヨブの姿を見る。

第1節 ヨブという人物

はじめに、旧約聖書『ヨブ記』の主人公ヨブという人物像についてはよく知られているが、簡単に人物ヨブを紹介しておこう。彼はウツという地に居たが、「そのひととなりは全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかった」¹⁷とある。ヨブには、7人の男の子と3人の女の子があった¹⁸。ヨブと彼の妻を加えれば、彼の家族は、12人になり、「イスラエルの12支族と呼

¹² 前掲書『エンキリディオン』第13章（第四教則）72ページ9行目。

¹³ 前掲書『エンキリディオン』第13章（第四教則）72ページ9行目。

¹⁴ 前掲書『エンキリディオン』第13章（第四教則）72ページ末。

¹⁵ 前掲書『エンキリディオン』第13章（第四教則）75ページ11行目から13行目。

¹⁶ 前掲書『エンキリディオン』第13章（第四教則）75ページ14行目。

¹⁷ 日本聖書協会編『聖書』（1968）の『ヨブ記』から引用する。これ以降の『ヨブ記』の引用も日本聖書協会（1968版を使用）による。『ヨブ記』第1章1節。ヨブが全くの義人であったというのは、この世から見てであり、聖書（神）の立場からではない。

内村 鑑三著『ヨブ記講演』（第2講ヨブの平生と彼に臨みし患難）10ページ4から5行目において、「しかしながら聖書の立場から見れば、ヨブの完全は絶対の完全にはあらず、更に完全なるを要する完全であった。これヨブ記に現れたる悲劇の生ずるゆえんである」とある。

ばれるように、それは完全数¹⁹であった。彼の財産は、家畜数で表され、羊7千頭、駱駝3千頭、牛5百くびき、雌驢馬5百頭であり、僕も非常に多くいた²⁰。「ヨブは遊牧民族の首長であり、それはアブラハムの如き存在²¹であった。彼は、裕福な家長であった。また、ヨブは、幸福な家族の父で、ヨブの息子も娘も成人し、それぞれの誕生日には相互に招待し合い²²、親子ならびに兄弟姉妹は、大変仲良く暮らしていた。

財産があり幸福な家族生活をしていたヨブは、また義人であり、敬虔な生活を送っていた²³と考えられる。

第2節 ヨブの試練とサタンの問題提起

ヨブが彼の敬虔な生活の報償として家畜などを財産にしていると考えていたサタンは、「ヨブはいたずらに神を恐れましようか²⁴と神に答える。サタンは、「あなたは彼とその家およびすべての所有物のまわりにくまなく、まがきを設けられた²⁵と、さらに「あなたは彼の勤労を祝福されたので、その家畜は地にふえた²⁶と続けている。そして、サタンは、神に「しかし今あなたの手を伸べて、彼のすべての所有物を撃ってごらん下さい。彼は必ずあなたの顔に向かって、あなたをのろうでしょう²⁷と言う。

財産があり幸福な家族生活をし、さらに義人であり敬虔なヨブは、すべての財産²⁸を失い、次に、彼のすべての子(家族)を失った²⁹。このとき、だが、ヨブは、神に決別すること³⁰は

¹⁸ 『ヨブ記』第1章2節参照。

¹⁹ 『ヨブ記—その今日への意義—』(浅野 順一著) 17ページ11行目参照。

²⁰ 『ヨブ記』第1章3節参照。

²¹ 『ヨブ記—その今日への意義—』(浅野順一著) 17ページ14行目から15行目参照。

²² 『ヨブ記』第1章4節参照。

²³ 前掲書『ヨブ記』第1章8節に、神はサタンに「あなたはわたしのしもべヨブのように全く、かつ正しく、神を恐れ、悪に遠ざかる者の世にいないことを気づいたか」と言っている。

²⁴ 『ヨブ記』第1章9節。ここで、「いたずらに」とは、理由・事情なくという意味であるが、サタンは、ヨブが神からの報償をあてにして敬虔な生活をしていると見なしている。

²⁵ 『ヨブ記』第1章10節。これは、ヨブの所有物(財産)と家族が保護されていることを指摘している。

²⁶ 『ヨブ記』第1章10節。これは、神の祝福によってヨブの財産が増えていることを意味している。

²⁷ 『ヨブ記』第1章11節。ここで「のろう」とは、元来「祝福する」の意味であり、また、「さようなら」を意味する人もいる(前掲書『ヨブ記—その今日への意義—』(三(義人ヨブ、その試練(一))の22ページ10行目から23ページ5行目参照)。

²⁸ 財産とは、牛、羊、雌驢馬、駱駝および僕であった。前掲書『ヨブ記』第5章19節には、「彼はあなたを六つの悩みから救い、七つのうちでも、災いはあなたに触れることがない」とある。ここで、6つの悩みとは、その第1章13節から19節に記されている4つの災難と、その第2章7節から9節に示された2つの災難である。合わせて6つの災難(艱難)である。前掲書『ヨブ記講演』(第三講 ヨブの哀哭)の11から13行目には、「六つ艱難は既に臨んだのである。牛と牝驢馬全部及ぶ僕若干、羊全部と僕若干、駱駝全部と僕若干、子女全部、健康、妻と六回に分かってこれを失ったのである」とある。

²⁹ 『ヨブ記』第1章13節から19節参照。

なかった。「わたしは裸で母の胎を出た。また裸でかしこに帰ろう。主が与え、主が取られたのだ。主のみ名をほむべきかな」³¹と、上着を裂き、頭をそり、地に伏して言った。ヨブがなお堅く保っておのれを全うしたので、サタンは、神に「人は自分の命のために、その持っているすべての物をも与えます。しかし、あなたの手を伸べて、彼の骨と肉とを撃ってごらん下さい。彼は必ずあなたの顔に向かって、あなたをのろうでしょう」³²と反撃した。そうすると、ヨブは、足から頭まで、腫れ物によって悩まされた³³。神は、サタンに「ただ彼の命を助けよ」³⁴と言っていることから計るに、ヨブは、瀕死の重篤状態にあったと予想される。この状態を「ヨブは陶器の破片を取り、それで自分の身を掻き、灰の中にすわった」³⁵と描いてある。そのとき、彼の妻は「あなたはなおも堅く保って、自分を全うするのですか。神を呪って死になさい」³⁶と嘆いている。これに対して、ヨブは「あなたの語るのとは愚かな女の語るのと同じだ。われわれは神から幸いをうけるのだから、災いもうけるべきではないか」³⁷と返答している。ここで愚かとは、知識や知恵がないという意味よりは、信仰心がないと解釈する³⁸。ここに、神を信じている、敬虔なヨブが描かれている。

サタンの問題提起は何を意味するのであろうか。それは、人間が財産、家族、地位、さらに権力を失っても、幸福であり得ようか、否あり得ないであろうと問うている。ヨブは「わたしは裸で母の胎を出た。また裸でかしこに帰ろう」と言う。しかし、「この世」で生活する人にとっては、イブやアダムの最初の人間のように、知恵の実を自身の判断で食べてしまう。この世の人々は、財産、家族、地位、ならびに権力にすぎた生活を送っている。その上、死に至る病に襲われたとき、妻から「あなたはなおも堅く保って、自分を全うするのですか。神を呪って死になさい」と言われるならば、絶望の淵に落とされること必定である。これまでして、信仰を保持する必要があるかとヨブの妻は思い、ヨブに辛くあたった。妻の嘆きの言葉に対し、ヨブは「あなたの語るのとは愚かな女の語るのと同じだ。われわれは神から幸いをうけるのだから、災いもうけるべきではないか」と答えている。サタンによって、財産、家族、地位、権力を失い、さらに糟糠の妻までを否定し、敬虔な生活と信仰を貫き、不幸に

³⁰ 『ヨブ記』第1章22節に、「すべてこのことにおいてヨブは罪を犯さず、また神に向かって愚かなことは言わなかった」とある。

³¹ 『ヨブ記』第1章21節。

³² 『ヨブ記』第2章4節から5節。

³³ 『ヨブ記』第2章7節参照。その病（腫れ物）とは、癩病であったと思われる。前掲書『ヨブ記講演』（第2講 ヨブの平生と彼に臨みし患難）の23ページ参照。

³⁴ 『ヨブ記』第2章6節。

³⁵ 『ヨブ記』第2章8節。

³⁶ 『ヨブ記』第2章9節。

³⁷ 『ヨブ記』第2章10節。

³⁸ 『ヨブ記—その今日への意義—』（浅野 順一著）34ページ末行には、「愚かは不信仰に通ずる」とある。

なる必要があるのか、自己本位な生き方もあるのではないかと問題を提起されているとも理解される³⁹。

経済学の生みの親アダム・スミスも自己本位な人間の行動が「神の見えざる手の導き」によって、社会の均衡（関係する人々すべてが満足する）状態が実現すると言っている。自己本位な生活と敬虔な生活が両立するとアダム・スミスは判断しているのかも知れない。義人ヨブは、財産、家族、地位、権力、健康、さらに妻に見放されても、神を堅く信じ、敬虔な生き方を全うした。

神に賛美され⁴⁰、ヨブのすべての財産は2倍になり、また、ヨブは息子7人と娘3人をもった。「主はヨブの終わりを初めより多く恵まれた」⁴¹。義人ヨブは、信仰と財産と家族との困らん生活（幸福）を両立させている。ヨブの場合にも、敬虔な生活と自己本位な生活が両立すると理解されるのではないであろうかと思われる。

第3節 ヨブの嘆きと三友人の慰めとその第一の応答

3.1 3友人の悲痛と疑惑

遠方からのヨブの三友人⁴²はヨブをいたわり、慰めるために来る。「彼らは目をあげてヨブを遠方から見たが、ヨブであることを認めがたいほどであったので、彼らは声を上げてなき、めいめい自分の上着を裂き、天に向かって塵をうちあげ、自分たちの頭の上にまき散らした。こうして7日7夜、彼と共に地に座して、ひと言も彼に話しかける者」⁴³はいなかった。三友人は、彼の辛苦が大きかったのを見たのは間違いない。7日7夜4人が無言であったというのは、全く一言も声を発せなかったのは何故であろうか。それは、ヨブの苦悩・患難がこの上ないと感じたからであろうが、しかし、それだけではなく、友の心に疑惑⁴⁴が生じて居たからかもしれない。

³⁹ 前掲書『ヨブ記—その今日への意義—』（浅野 順一著）（四 その試練（二））32ページ9行目から14行目参照。

⁴⁰ 『ヨブ記』第42章10節に、「ヨブがその友人たちのために祈ったとき、主はヨブの繁栄をもとにかえし、そして主はヨブのすべての財産を二倍にした」とある。

⁴¹ 『ヨブ記』第42章12節。よって、羊1万4千頭、駱駝6千頭、牛1千くびき、牝驢馬1千頭とされた。

⁴² 3人の友とは、テマンびとエリパス、シュヒびとビルダデ、そしてナアマびとゾパルであった。

⁴³ 『ヨブ記』第2章12節から13節。ここで「上着を裂き」とか「塵をうちあげる」ことは、悲痛や哀悼の意を表す動作である（前掲書『ヨブ記—その今日への意義—』（浅野 順一著）（四 その試練（二））37ページ参照）。

⁴⁴ 内村鑑三著『ヨブ記講演』（第三講 ヨブの哀哭）30ページ3行目から5行目には、「疑うヨブあるいは隠れたる大罪を犯してこの禍を受けしあらざるか、彼れ信仰に堅く立ち行う所正しからにはかくまで大いなる禍に会す道理なきにあらずや」とある。すなわち、3人の友人がヨブに「大罪」あるのではないかと疑惑を懐いている。

3.2 ヨブの嘆き

『ヨブ記』（第3章）には、神がもたらした繁栄と幸福が取り去られた不幸と悲惨に絶えかねていたヨブの悲嘆や呻きや恐れからの叫びが描かれている。ヨブは、口を開き、「わたしの生まれた日は滅びうせよ。『男の子が、胎にやどった』と言った夜もそのようになれ」⁴⁵と言った。すなわち、ヨブは、かれの誕生の日を呪い出生を嘆いた⁴⁶。この対応は、本稿第2節で見たような（財産や子を失った時の）対応や、また先に示したように、妻に対し「愚かな女」と言ったヨブの対応とは異質である。ヨブの患難が極に足したのであろう。「なにゆえ、わたしは胎から出て、死ななかつたのか。腹から出たとき息が絶えなかつたのか。なにゆえに、ひざがわたしをうけたのか。なにゆえ、乳ぶさがががあって、わたしはそれを吸ったのか」⁴⁷と言う。自身の成長を詛い、「なにゆえ、わたしは人知れずおる胎児のごとく、光を見ないみどりごのようではなかつたのか。かしこでは悪人も、あばかれることをやめ、うみ疲れた者も、休みを得、捕らわれ人も共に安らかにおり、追い使う者の声を聞かない」⁴⁸と続けている。「なにゆえ、悩む者に光を賜い、心の苦しむ者に命を賜わつたのか。……。なにゆえ、その道の隠された人に、神がまがきをめぐらされた人に、光を賜わるのか」⁴⁹と嘆いている。ヨブは、神の恵みや愛に冷酷さを感じている。というのは、ヨブは、生まれて来たことを後悔し、死を望んでいるからである。

3.3 テマン人エリパズによる第一の応答

これに対し、彼の友人（テマン人エリパズという人物）は答えるが、この友人の返答は、すべからく賞罰応報（主義）⁵⁰にもとづくものであった。つまり、罪過には神の怒りが下り、善い行いには幸福が与えられ、悪行には不幸せがもたらされることになるという考えであった。たとえば、「考えたてみよ、だれが罪のないのに、滅ぼされた者があるか。どこに正しい者で、断ち滅ぼされた者があるか。わたしの見たところによれば、不義を耕し、害悪をまく者は、それを刈り取っている。彼らは神のいぶきによって滅び、その怒りの息によって消えうせる」⁵¹と答えた⁵²とある。また、その彼の友は、神の全能を説き、「しかし、わたしである

⁴⁵ 『ヨブ記』 3章3節。

⁴⁶ 前掲書『ヨブ記講演』（第三講 ヨブの哀哭）の31ページ10行目から32ページ1行目を参照。ここでも内村鑑三は、他者ではなく、神を詛い信仰をすてるのではなく、自身の誕生の日を詛うヨブの信仰心を讃えている。

⁴⁷ 『ヨブ記』 第3章11節から12節。

⁴⁸ 『ヨブ記』 第3章16節から18節。

⁴⁹ 『ヨブ記』 第3章20節から23節。なお、引用文内の（……）は、引用省略を意味する（以下同様）。

⁵⁰ 『ヨブ記』 第6章53ページでは、これを「信賞必罰の応報主義」と言っている。

⁵¹ 『ヨブ記』 第4章7節から9節。

ならば、神に求め、神にわたしの事をまかせる』⁵³と続けて、「見よ、神に戒められる人はさいわいだ。それゆえ全能者の懲らしめを軽んじてはならない』⁵⁴とその友は答えた。

この友（エリパズ）による神を受け入れるという信仰は優れているが、しかし、瀕死状態にあるヨブにとっては、その戒めを受け入れることは耐えがたいことなのかもしれない。

ヨブは、その友が彼の嘆きの意味を理解していない⁵⁵と不満を懐き、彼自身の嘆きの意味を弁明⁵⁶して、さらに、神の戒めを拒んだこともないと答え⁵⁷、「まことに、わたしのうちに助けはなく、救われる望みは、わたしから追い払われた』⁵⁸と結んでいる。さらに、友の頼りなさを嘆き⁵⁹、「わたしに教えよ、そうすればわたしは黙るであろう。わたしの誤っているところをわたしに悟らせよ。正しい言葉はいかに力のあるものか。しかし、あなたがたの戒めは何を戒めているのか』⁶⁰と友の無力を責めている。「どうぞ、思いなおせ、まちがってはならない。さらに、思いなおせ、わたしの義は、なおわたしのうちにある』⁶¹と言っている。だが、これは、彼の友の助言や慰みがヨブ自身の希望しているものではなく、間違った返答であるのであるが、しかしヨブが神に信頼する点は保たれている。

ヨブは、彼自身の望みについて、「わが骨よりもむしろ死を選ぶ。わたしは命をいとう。わたしは長く生きることを望まない。わたしに構わないでください。わたしの日は息に過ぎないのだから』⁶²と語り、死ぬことを拒否はしないと言う。ヨブは、エラスムスが想定しているように、靈魂の不滅性、すなわち、エラスムスの概念では、「幸福の不死性』⁶³（新約聖書の

⁵² 答えた『ヨブ記』でも記されているが、実際には、ヨブの問いに答えているわけでない。敬虔な義人ヨブを慰めなどしている。

⁵³ 『ヨブ記』第5章8節。

⁵⁴ 『ヨブ記』第5章17節。

⁵⁵ 『ヨブ記』第6章2節から3節で「どうかわたしの憤りが正しく量られ、同時にわたしの災いも、はかりにかけられるように。そうすれば、これは海の砂よりも重いに相違ない。それゆえ、わたしは言葉が軽率であったのだ」。

⁵⁶ 『ヨブ記』第6章4節において、「全能者の矢が、わたしのうちにあり、わたしの霊はその毒を飲み、神の恐るべき軍勢が、わたしを襲い攻める」と彼の苦闘の理由を述べている。ヨブに神が敵対していることを嘆いている。

⁵⁷ 『ヨブ記』第6章8節から10節において、「どうかわたしの求めるものが獲られるように。どうか神がわたしの望むものをくださるように。どうか神がわたしを打ち滅ぼすことをよしとし、み手を伸べてわたしを断たれるように」と言う。これはヨブが神の戒めによって死を覚悟することを示している。

⁵⁸ 『ヨブ記』第6章13節。

⁵⁹ 『ヨブ記』第6章14節から21節。

⁶⁰ 『ヨブ記』第6章24節から25節。

⁶¹ 『ヨブ記』第6章29節。

⁶² 『ヨブ記』第7章15節から16節。また『ヨブ記』第7章7節に、「記憶せよ、わたしの命は息にすぎないことを」とある。またその9節から10節に「雲が消えて、なくなるように、陰府に下るものは上がることがない。彼は再びその家に帰らず、彼の所も、もはや彼を認めない」と言う。

⁶³ 前掲書『エンキリディオン』第2章（人生においては警戒すべきである）12ページ16行目。

「永遠の命」を心に懐いていたと思われる。というのは、わが骨よりもむしろ死を選び、わたしは命をいとい、さらに長く生きることを望まないと言っていることから判断される。

彼の悩みは、神の重荷である自身から咎を除き、苦しみを除くことであったが、実際、ヨブは、なぜ、神がヨブ自身を苦しめるのか理解できないでいた。その苦しみを友は理解していなかった。ゆえに、「なにゆえ、わたしをあなたの的にし、わたしをあなたの重荷とされるのか。なにゆえ、わたしのとがをゆるさず、わたしの不義を除かれないのか」⁶⁴と神に問うている。

3.4 シュヒ人ピルダテ⁶⁵による第一の応答

しかし、彼の別の友（シュヒびとピルダテという人物）は、ヨブの先の友人と同様に、ヨブの子らの死について賞罰応報（主義）にもとづいて返答する。彼はヨブを責めて、すなわち、「全能者は正義を曲げられるであろうか。あなたの子たちが彼に罪を犯したので、彼らをそのとがの手に渡されたのだ」⁶⁶と切り出す。さらに、「あなたがもし神を求め、全能者に祈るならば、あなたがもし清く、正しくあるならば、彼は必ずあなたのために立って、あなたの正しいすみかを榮えさせる」⁶⁷とたたみかける。そして、「すべて神を忘れた者の道はこのとおりだ。神を信じない者の望みは滅びる」⁶⁸と結んでいる。「見よ、神は全き人を捨てられない。また悪を行う者の手を支持しない」⁶⁹と戒めた。この友は、ヨブが全き人ではなく、悪を行った結果としてヨブが現在の苦しみを受けていると戒めている。その戒めは、実際には、ヨブが義人であり、神を恐れ、神に沿っていることを理解していないものであった。

ヨブは、この友の戒めについては十分に知っていると言答し、「まことにわたしはその事のとおりであることを知っている。しかし人はどうして神の前に正しくありえようか。よし彼と争おうとしても、千に一つも答えることができない。彼は心賢く、力強くあらわれる。だれが彼にむかい、おのれをかたくなにして、榮えた者があるか」⁷⁰と言う。ヨブは、神が力強く、神と論争しても負かされ、神にはむかっても無益であることを知っていた。「彼が大いなる事をされること測りがたく、不思議なことをされる事は数知れない。見よ、彼がわたしのかたわらを通られても、わたしは彼を見ない。彼は進み行かれるが、わたしは彼を認めない。見よ、彼が奪いさられるのに、だれが彼をはばむことができるか」⁷¹と言う。力強い神が

⁶⁴ 『ヨブ記』 7章 20節から 21節。

⁶⁵ 前掲書『ヨブ記講演』（第六講 神学者ピルダテ語る）によると、ヨブの友人ピルダテは神学者とある。

⁶⁶ 『ヨブ記』 第8章 3節から 4節。

⁶⁷ 『ヨブ記』 第8章 5節から 6節。

⁶⁸ 『ヨブ記』 第8章 13節。

⁶⁹ 『ヨブ記』 第8章 20節。

⁷⁰ 『ヨブ記』 第9章 2節から 4節。

ヨブに隠されていることを訴えている。「どうしてわたしは彼に答え、言葉を選んで、彼と議論することができようか。たといわたくしが正しくともこたえることができない。わたしを責める者にあわれみを請わなければならない。……。たといわたしは正しくとも、わたしの口はわたしを罪ある者とする。たといわたしが罪なくとも、彼はわたしを曲がった者とする。わたしは罪がない、しかしわたしは自分を知らない。わたしは自分の命をいとう」⁷²と言う。ヨブは、神には、悪人でない人でも、その人を罪人にできる能力があると答えている。神に比して自分の無力を訴えている。「災いがにわかにな人を殺すような事があると、彼は罪のない者の苦難をあざ笑われる。世は悪人の手に渡されてある。彼はその裁判人の顔をおおわれる。もし彼でなければ、これはだれのしわざか」⁷³と言う。「わたしはわがもろもろの苦しみを恐れる。あなたがわたしを罪なき者とされないことをわたしは知っているからだ。わたしは罪あるものとされている」⁷⁴と言う。

ヨブは仲裁者を請うて訴える。「神はわたしのように人ではないゆえ、わたしはかれにこたえることができない。われわれは共にさばきにのぞむことができない。われわれの間には、われわれふたりの上に手を置くべき仲裁者がいない」⁷⁵と言う。ヨブは、神が奪うなら、その命もいとわないと覚悟しているが、しかし、自分に罪があるために神に滅ぼされることを義としていない。

ヨブは、彼の苦しみを自分の嘆きとして神に訴えた。ヨブは、「自分の命」⁷⁶を厭い、自身の「魂の苦しみ」⁷⁷によって語った。「わたしは神に申そう、わたしを罪ある者とされないように。なぜわたしと争われるかを知らせてほしい」⁷⁸と言う。神に直接訴えて言うことには、「あなたはしえたげをなし、み手のわざを捨て、悪人の計画を照らすことを良しとされるのか」⁷⁹と言い、さらに、「あなたはなにゆえわたしのとがを尋ね、わたしの罪を調べるのか。あなたはわたしの罪のないことを知っておられる」⁸⁰と言う。自分を創られ、慈しみをもって生まれた神であるが、罪を犯すと、「あなたは証人を入れ替えてわたしを攻め、わたしに向かってあなたの怒りを増し、新たな軍勢を出してわたしを攻められる」⁸¹と恐れ、「なにゆえ

⁷¹ 『ヨブ記』 第9章10節から12節。

⁷² 『ヨブ記』 第9章14節から21節。

⁷³ 『ヨブ記』 第9章23節から24節。

⁷⁴ 『ヨブ記』 第9章28節から29節。

⁷⁵ 『ヨブ記』 第9章32節から33節。

⁷⁶ 『ヨブ記』 第10章1節より抜粋。

⁷⁷ 『ヨブ記』 第10章1節より抜粋。

⁷⁸ 『ヨブ記』 第10章2節。

⁷⁹ 『ヨブ記』 第10章3節。

⁸⁰ 『ヨブ記』 第10章6節。

⁸¹ 『ヨブ記』 第10章17節。

あなたはわたしを胎から出されたか、わたしは息絶えて目に見られることはなく、胎から墓に運ばれ、初めからなかった者のようであったなら、よかった」⁸²と言う。ここでも、先に『ヨブ記』（3章3節）で見たように、自身の誕生を呪っている。

3.5 ナアマ人ゾバルによる第一の応答

彼のもう一人の友人（ナアマびとゾバルという人）は、先の二人の友人と同様に、ヨブの苦しみを全知全能の神による、賞罰応報（主義）にもとづいて返答し、神を弁護して、「口の達者な人は義とされるであろうか。あなたのむなしい言葉は人を沈黙させるだろうか」⁸³と切り出し、ゾバルは、神が知識と知恵においてヨブをはるかに優っている事を告げて言う。すなわち、「どうぞ神が言葉を出し、あなたにむかってくちびるを開き、知恵の秘密をあなたに示されるように。神はさまざまな知識をもたれるからである。それであなたは知るがよい、神はあなたの罪よりも軽くあなたを罰せられることを。あなたは神の深い事を窮める事ができるか。全能者の限界を窮めることができるか。それは天よりも高い、あなたは何をなし得るか。それは陰府よりも深い、あなたは何を知りうるか」⁸⁴と言い、「しかし野ろばの子が人として生まれるとき、愚かな者も悟りを得るであろう」⁸⁵と結んでいる。ゾバルは、神の全知を讃え、ヨブが誇る知識⁸⁶の不甲斐なさを強調している。また友人ゾバルは、どのようにして神のみ業（神はあなたの罪よりも軽くあなたを罰せられること）を理解し得たのであろう。人間が神の業について知り得ないことをヨブは知っているが、どうしてその友は、神の業を知り得たのであろうか。その友ゾバルは、神の神聖さを冒瀆している事になる。ヨブは、この人間の行為・知恵を問題にしている。

ゾバルは、ヨブの死を請うほどの苦難とその叫びに返答するが、それは義人で全きヨブには相応しくないものであったが、「もしあなたの手の不義があるなら、それを遠くに去れ、あなたの天幕に悪をすまわせてはならない。そうすれば、あなたは恥じてはならず、顔をあげることができ、堅く立って、恐れることはない」⁸⁷と言い、そして「しかし悪しき者の目は

⁸² 『ヨブ記』第10章18節から19節。

⁸³ 『ヨブ記』第11章2節から3節。

⁸⁴ 『ヨブ記』第11章5節から8節。

⁸⁵ 『ヨブ記』第11章12節。ここで、ヨブを野驢馬に喩えているとしたなら、ゾバルがいかに友人ヨブをおとしめているかが分かる。友人ゾバルは、ヨブを愚か者と見ているのかもしれない。

⁸⁶ ヨブは、『ヨブ記』第9章6節から9節において、その知識の一端を示している。「彼が、地を震い動かしてその所を離れさせると、その柱はゆらぐ」、「彼が日に命じられると、日は出ない。彼はまた星を閉じ込められる」、「彼は、北斗、オリオン、プレアデスおよび南の密室を造られた」とある。ヨブは、地震や天文学に関する知識を伸べている。内村鑑三は、ヨブには「地文学の知識が窺える」と、「天文学の知識」があると指摘している（前掲書『ヨブ記講演』（第七講 ヨブ仲保者を要求す）の70ページ6行目から14行目参照）。

⁸⁷ 『ヨブ記』第11章14節から15節。

衰える。彼らは逃げ場を失い、その望みは息の絶えるに等しい⁸⁸と結ぶ。この友人は、ヨブを罪人であるかのように見て、罪人は死ぬことになるという。この友人も義人ヨブを誤認している。

第4節 ヨブは神を呼ばれる

4.1 ヨブの反撃と呼びかけ

ヨブは、神による創造を見、全知全能については悟っていると答え、「しかしわたしも、あなたがたと同様に悟りをもつ。わたしはあなたがたに劣らない。だれがこのようなことを知らないであろうか⁸⁹と反撃に出る。さらに自身が罪人ではないとして、ヨブは「わたしは神に呼ばわって、聞かれた者であるのに、その友の物笑いとなっている。正しく全き人は物笑いとなる⁹⁰と言う。この世には、ヨブは、悪人が栄えていると思ひなし、「かすめ奪う者の天幕は栄え、神を怒らす者は安らかである。自分の手に神を携えている者も同様である⁹¹と訴える。ヨブは、生き物すべては「主の手がこれらをなしたことを知らぬ者があるか⁹²といい、「すべての生き物の命、およびすべての人の息は彼の手のうちにある⁹³と結んでいる。ヨブは、天地創造の神を認めている。

「知恵と力は神と共にあり、深慮と悟りも彼のものである⁹⁴と述べ、この世を支配する神の知恵と力が実証されている⁹⁵こと示し、ヨブは、3人の友の知っていることはすべて自身も知っているとして反撃する。ヨブは、それを創造し、力のある神と語ることを望んでいると訴えて、「あなたがたの知っていることはわたしも知っている。わたしはあなたがたに劣らない。しかし、わたしは全能者に物を言おう、わたしは神と論ずることを望む。あなたがたは偽りをもってうわべを繕う者、皆、無用の医者だ。どうか、あなたがたは全く沈黙するように。これがあなたがたの知恵であろう⁹⁶と言う。ヨブは、すなわち、神が全知全能であり、

⁸⁸ 『ヨブ記』11章20節。

⁸⁹ 『ヨブ記』12章3節。

⁹⁰ 『ヨブ記』12章4節。

⁹¹ 『ヨブ記』12章6節。この節の、「自分の手に神を携えている者」の解釈として、前掲書『ヨブ記講演』（第九講 神の探索）において「自己のすべてが神に適い、神はいたくこれをめでてすべてにおいて己の味方であるとなす。すなわち彼らは己を悉く棄てて神に随わんとするに非ず、己を悉く立てて神をしてそれに随わしめんとする、否神がそれに随いおるとみなすのである」と説明している。内村鑑三は、その者を自己中心者として解釈している。

⁹² 『ヨブ記』12章9節からの抜粋。ここで、「これらをなしたこと」とは、神が創造（作った）ことを意味している。

⁹³ 『ヨブ記』12章10節。

⁹⁴ 『ヨブ記』12章13節。

⁹⁵ 『ヨブ記』12章14節から25節参照。

⁹⁶ 『ヨブ記』13章2節から5節。

神の前ではいかなる人も罪人にされることを知っている。神と直接対話する・論ずることを望んでいる。「あなたがたの格言は灰のことわざだ。あなたがたの盾は土の盾だ。黙して、わたしにかかわるな、わたしは話す。何事でもわたしにくるなら、来るがよい。わたしはわが肉をわが歯に取り、わが命をわが手のうちに置く。見よ、彼はわたしを殺すであろう。わたしは絶望だ。しかしな、わたしはわたしの道を彼の前に守り抜こう。これこそわたしの救いとなる。神を信じない者は、神の前に出ることができない」⁹⁷と云い、ヨブは極限状態に置かれ、絶望しているが、彼の友人は悔い改めおよび当てにならない・頼りにならないことしか言わないので、黙して語るなど友人に命じて、ヨブ自身が神と話すことを決意している。そして、自身の道⁹⁸を彼の前に守り抜くことを誓い、これこそわたしの救いとなると決意している。

ヨブは、神を信じ、敬っているが、なぜヨブ自身が罪人になるのかについて納得の行く説明を神に問い求めている。彼は、神が彼に応答することを望んでいる。「そしてお呼びください、わたしは答えます。わたしに物を言わせて、あなたご自身、わたしにお答えください。わたしのよこしまと、わたしの罪がどれほどであるか。わたしのとがと罪とをわたしに知らせてください。なにゆえ、あなたはみ顔をかくし、わたしをあなたの敵とされるのか」⁹⁹と神に語りかける。ここで、ヨブは、神が顔をかくし、自身の敵とならないことを願い、そして彼は神に会って語り、自身の罪がなんであるかを聞き、その罪の故に神によって滅ぼされるであろうことを覚悟している。このように彼が神と直接あうことを求め、神自身の裁きを期待しているのは、彼が堅く神を信じていたからである。

4.2 ヨブの願い

同時に、ヨブは、人間としての弱さを正直に告解し、神が陰府で自分に呼ばれることを願っている。彼は「女から生れる人は日が短く、悩みに満ちている。彼は花のように咲き出て枯れ、影のように飛び去って、止まらない」¹⁰⁰と云う。「あなたはこのような者にさえ目を開き、あなたの前に引き出して、さばかれるのであろうか。だれが汚れたものうちから清いものをだすことができようか、ひとりもない」¹⁰¹と続ける。「彼から目をはなし、手をひいてく

⁹⁷ 『ヨブ記』第13章12節から16節。ここで、「わたしはわが肉をわが歯に取り、わが命をわが手のうちに置く」の意味はよく分からない。『ヨブ記—その今日への意義—』（九（人の道と神の道））の96ページ5行目から7行目において、「自分の生命を非常に危険な状態に置く」ことであろうと書いてある。ここでは絶望したヨブの心境が述べられている。

⁹⁸ そのヨブの道とは、敬虔な生活である。ヨブは、この生活を貫くことが救いであると確信している。

⁹⁹ 『ヨブ記』第13章22節から24節。

¹⁰⁰ 『ヨブ記』第14章1節から2節。

¹⁰¹ 『ヨブ記』第14章3節から4節。

ださい。そうすれば彼は雇人のように、その日を楽しむことができるでしょう」¹⁰²と訴え、神の怒りで死んだとしても、陰府からの再生を願って、「どうぞ、わたしを陰府にかくし、あなたの怒りのやむまで、潜ませ、わたくしのために時を定めて、わたくしを覚えてください」¹⁰³と言う。「わが解放の来るまでまつでしょう。あなたがお呼びになるとき、わたしは答えるでしょう。あなたはみでの業を顧みられるでしょう」¹⁰⁴と告白し、「わたしのとがは袋の中に封じられ、あなたはわたしの罪をぬりかえかくされるでしょう」¹⁰⁵と再生を願う。

4.3 エリパズによる第二回目の応答

ヨブは、本稿の4.1項で見たように、「しかしわたしも、あなたがたと同様に悟りをもつ。わたしはあなたがたに劣らない。だれがこのような事を知り得ないであろうか」¹⁰⁶と反論し、さらに、ヨブが「しかし、わたしは全能者に物を言おう、わたしは神と論ずることを望む。あなたがたは偽りをもってうわべを繕う者、皆、無用の医者だ。どうか、あなたがたは全く沈黙するように。これがあなたがたの知恵であろう」¹⁰⁷と嘲ったので、これに対し、彼の友エリパズ¹⁰⁸は、怒って応答し、ヨブの知識を憐いものである¹⁰⁹と言い、さらに彼の不信仰を攻撃して、「ところがあなたは神を恐れる事を捨て、神の前に祈ることを止めている。あなたの罪があなたの口に教え、あなたは悪賢い人の舌を選び用いる。あなたの口みずからがあなたの罪を定める、わたしではない。あなたのくちびるがあなたに逆らって証明する」¹¹⁰とヨブの語りに罪が証されると言う。その友エリパズは、さらに、ヨブの不義を説き¹¹¹、「まして憎むべき汚れた者、また不義を水のように飲むひとにおいては」¹¹²と言う。さらに、先

¹⁰² 『ヨブ記』第14章6節。

¹⁰³ 『ヨブ記』第14章13節。

¹⁰⁴ 『ヨブ記』第14章14節から16節。

¹⁰⁵ 『ヨブ記』第14章17節。

¹⁰⁶ 『ヨブ記』第12章3節。

¹⁰⁷ 『ヨブ記』第13章3節から5節。

¹⁰⁸ 『ヨブ記』第13章3節から5節。エリパズのヨブに答えうる姿勢は、『ヨブ記』第15章9節に、「あなたが知るものは、われわれも知るではないか。あなたが悟るものはわれわれもさるとではないか」とある。また『ヨブ記』第15章10節に示される。すなわち、「われわれの中にはしらがの人も、年老いた人もあって、あなたの父よりも年上だ」とある。エリパズは、年功によって、神の知恵や悟りの得られる順序づけが決まっていると思っているのであろうか。内村鑑三は、前掲書『ヨブ記講演』（第十一講 エリパズ再び語る）において、「エリパズのこの態度は、心霊問題に関しては全然不合理なる態度である。心霊のことにおいては一人一人独立である」と言う。確かに、心霊問題にあっては、年齢や社会的権威は無力である。

¹⁰⁹ 『ヨブ記』第15章1節から3節を参照。

¹¹⁰ 『ヨブ記』第15章4節から6節。エリパズは、ヨブが神と直接対話したいと欲求しているところに不信仰があると考えているのであろうか。神に罪の赦しを請うこと自体に罪があるというのであろうか。

¹¹¹ 『ヨブ記』第15章14節参照。

¹¹² 『ヨブ記』第15章16節。

祖伝来の教えとて、悪しき人は一生苦しみ、富める者とはならず、剣にはねられると言って、神を信じない者のやからは子がなく、賄による天幕は、火で焼き滅ぼされると続けている¹¹³。

ここに至っては、この友エリパズは、義人ヨブが智者ではなく、信仰なき者であると扱っている。この友エリパズは、第二回目の応答では、ヨブを攻撃している。

4.4 ヨブ仲保者・証人と希求

これに対してヨブは答える。ヨブは、三人の友に対して、「あなたがたは皆人を慰めようとして、かえって人を煩わす者だ」¹¹⁴と言い、「あなたは何に激して答をするか」¹¹⁵と非難する。神の怒りがどのような結果を自身にもたらすかを悟っていると語り¹¹⁶、ヨブは続けて、「しかし、わたしの手には暴虐がなく、わたしの祈りは清い」¹¹⁷と堅く訴えている。

ヨブは、天に自身を弁護する保証人がいると確信し、天に保証人を求める。ヨブは「見よ、今でもわたしの証人は天にある。わたしの友はわたしをあざける、しかしわたしの目は神に向かって涙を注ぐ。どうか彼が人のために神と弁論し、人とその友との間をさばいてくれるように」¹¹⁸と仲保者・保証人を求め、希望を懐いている。

しかし、ヨブは絶望し、死を覚悟して、「まことにあざける者どもはわたしのまわりにあり、わが目は常に彼らの侮りを見る。どうか、あなた自ら保証となられるように。ほかにだれがわたしのために保証となってくれる者があるであろうか。あなたは彼らの心を閉ざして、悟ることのないようにされた」¹¹⁹と神自身が保証人になることを求めるが、神はかたくなであると嘆く。「わたしがもし陰府をわたしの家として望み、暗やみに寢床をのべ、穴に向かって『あなたはわたしの父である』と言い、うじに向かって『あなたはわたしの母、わたしの姉妹である』と言うならば、わたしの望みはどこにあるか、だれがわたしの望みを見ることができようか」¹²⁰と語り、ヨブはまだ闇の中にある。

4.5 ビルダデによる第二回目の応答

ビルダデが答える。彼は、ヨブを攻撃し、「怒っておのが身を裂く者よ、あなたのために地は棄てられるであろうか。岩はそのところから移されるだろうか」¹²¹とヨブの叫びの空し

¹¹³ 『ヨブ記』 第15章17節から24節参照。

¹¹⁴ 『ヨブ記』 第16章2節の抜粋。

¹¹⁵ 『ヨブ記』 第16章3節の抜粋。

¹¹⁶ 『ヨブ記』 第16章6節から16節参照。

¹¹⁷ 『ヨブ記』 第16章17節。

¹¹⁸ 『ヨブ記』 第16章19節から21節。

¹¹⁹ 『ヨブ記』 第17章2節か4節。

¹²⁰ 『ヨブ記』 第17章13節から15節。

さ¹²²を述べる。さらに、「悪しき者の光は消え、その火の炎は光を放たず、その天幕のうちの光は暗く、彼の上のともしびは消える」¹²³と言い、悪人は衰退し、自身の罫に陥り、最後には滅びると論じている。ヨブ人身をなぞらえて、「その力は飢え、災いは彼をつまずかすために備わっている。その皮膚は病によって食いつくされ、死のういごは彼の手足を食いつくす」¹²⁴と言う。「まことに、悪しき者の住まいはこのようであり、神を知らない者の所はこのようである」¹²⁵と結んでいる。

この友ビルダデもまた、義人ヨブが智者ではなく、信仰なき者であると扱っている。この友ビルダデも、第二回目の応答では、ヨブを攻撃している。

4.6 ヨブを贖う者

三人の友がそろいもそろってヨブ自身を悪人あるいは罪人としたが、ヨブは「もしあなたがたが、まことにわたしに向かって高ぶり、わたしの恥を論じるならば、『神がわたしをしえたげ、その網でわたしを囲まれたのだ』と知るべきだ」¹²⁶と言い、実際には、「見よ、わたしが『暴虐』と叫んでも答えられず、助けを呼び求めても、さばきはない」¹²⁷と説いている。続けて、ヨブは神の業を列挙して言うには、つまり、神は、わたしの栄えをはぎ取り、わたしの望みを木のように抜き去り、わたしを敵のひとりのように思われ¹²⁸、兄弟たちを遠く離れさせ、知人を疎遠にし、親しい人や宿泊人やはしためをヨブの他国人とした¹²⁹。また、「わたしの息はわが妻にいとわれ、わたしは同じ腹の子たちにきらわれる。親しい人々は皆わたしを侮り、わたしの愛した人々はわたしにそむいた」¹³⁰と言う。ヨブが繁栄から見放され、兄弟や友から疎遠とされ、妻や兄弟に嫌われ、親しい人々に背を向けられ、彼は孤立無援の状況に置かれた。このようにしたのは、神であって、他のだれでもないヨブは嘆いている。自虐的になって、ヨブは「わが友よ、わたしをあわれめ、わたしをあわれめ、神の手がわた

¹²¹ 『ヨブ記』第18章4節。

¹²² このところの解釈として、内村鑑三は、『ヨブ記講演』（第十四講 ビルダデ再び語る）の132ページの12行目において、「すなわち無益な空言を慎め」と解釈している。

¹²³ 『ヨブ記』第18章5節から6節。

¹²⁴ 『ヨブ記』第18章12節から13節。

¹²⁵ 『ヨブ記』第18章21節。

¹²⁶ 『ヨブ記』第19章5節から6節。

¹²⁷ 『ヨブ記』第19章5節から7節。

¹²⁸ 『ヨブ記』第19章9節から12節には、「彼はわたしの栄えをわたしからはぎ取り、わたしのこうべから冠を奪い、四方からわたしを取りこわして、うせさせ、わたしの望みを木のように抜き去り、わたしに向かって怒りを燃やし、わたしを敵のひとりのように思われた」とある。

¹²⁹ 『ヨブ記』第19章13節から15節参照。

¹³⁰ 『ヨブ記』第19章17節と19節。

しを打ったからである。あなたがたは、なにゆえに神のようにわたしを責め、わたしの肉をもって満足しないのか¹³¹と自棄する。

再びヨブは、証人を希求し、「どうか、わたしの言葉が書きとめられるように。どうか、わたしの言葉が書物に記されるように。鉄筆と鉛とをもってながく岩に刻まれるように。わたしは知る、わたしをあがなう者は生きておられる、後の日に彼は必ず地の上に立たれる。わたしの皮がこのように滅ぼされたのち、わたしは肉を離れて神を見るであろう。しかもわたしの見方としてみるであろう。わたしの見る者はこれ以外のものではない。わたしの心はこれを望んでこがれる¹³²と請う。ヨブは、彼の証人が必ず現れると強く信じ、強力にその証人の出現をまみえることを願う。

4.7 ゾバルによる第二回目の応答

ゾバルは、彼の悟りの霊によって答えた。ヨブの苦しみは、悪によるものであり、罪によると戒めて、「あなたはこの事を知らないのか、昔から地の上に人を置かれてよりこのかた、悪しき人の勝ち誇はしばらくであって、神を信じない者の楽しみはただつかのまである¹³³と言い、ヨブが悪人であると攻撃し、彼に神を信じることを求めた。さらに、ビルダデと同様に、悪しき人は、衰え、とこしえに滅び、夢のように飛び去り、再び見る事がなく、夜の幻のように追い払われる等と言う。「天は彼の罪をあらわし、地に起こって彼を攻めるであろう。その家の財産は奪い去られ、神の怒りの日に消えうせるであろう。これが悪人の神から受ける分、神によって定められた嗣業である¹³⁴と結んでいる。この友ゾバルもまた、義人ヨブを悪人として、信仰なき者であると扱っている。

この友ゾバルも、第二回目の応答では、ヨブを口汚く攻撃している。ゾバルは、悪人ヨブの繁栄は一時的で、彼の財産も神によって奪われる定めであると弾劾する。

4.8 ヨブの疑惑

これに対し、ヨブは、自身が悪人ではなく義人であるが、しかし、「この世」で悪人が栄えているのは、神が怒りをもって苦しみを悪人に与えていないのではないかという疑問を懐いている。ヨブは「なにゆえ悪しき人が生きながらえ、老齢にも達し、かつ力強くなるのか¹³⁵と疑問を呈する。「その家は安らかで、恐れがなく、神のつえは彼らの上に臨むことがない¹³⁶

¹³¹ 『ヨブ記』 第19章21節。

¹³² 『ヨブ記』 第19章23節から27節。

¹³³ 『ヨブ記』 第20章4節から5節。

¹³⁴ 『ヨブ記』 第20章27節から29節。

¹³⁵ 『ヨブ記』 第21章7節。

と疑問を繰り返す。そして、ヨブは「すなわち彼ら自身の目にその滅びを見せて、全能者の怒りを彼らにのませられるように」¹³⁷と眩く。しかし、神はその思いのままにことをなすことを願う。「あなたがたは道いく人々に問わなかったか、彼らの証言を受け入れないのか。すなわち、災いの日に悪人は免れ、激しい怒りの日に彼は救い出される。だれが彼に向かつて、その道を告げ知らせる者があるか、だれが彼のした事を彼に報いる者があるか」¹³⁸と言い、「それで、あなたがたはどうしてむなしい事をもって、わたしを慰めようとするのか。あなたがたの答えは偽り以外の何ものでもない」¹³⁹と結ぶ。

この世では悪人が繁榮しているが、ヨブ自身は財産、家族、地位、権力さらに健康を損ない、妻にも窘められ絶望しているが、三友人は、自分を悪人と言うが、そうであれば財産をもち、生きながらえるはずである。この世の悪人のように生きながらえ、老齢に足するはずであるが、だが、ヨブ自身は財産等を失い、瀕死の状態である。ここに、ヨブは「あなたがたの答えは偽り以外の何ものでもない」と怒りをぶちまける。

4.9 エリパズの第三回目の応答と隠れた神

エリパズは、攻撃に対して怒りをもって対応するヨブに答えて、おのれを低くし神に祈り、神と和らぐことを奨めて、「神はあなたが神を恐れることのゆえに、あなたを責め、あなたをさばかれるのであろうか。あなたの悪は大きいではないか。あなたの罪は、はてしない」¹⁴⁰と言う。人が正しくても、神は何の益するところもないが、「あなたがもし全能者に立ち返って、おのれを低くし、あなたも天幕から不義を除き去り、こがねをちりの中に置き、オフルのこがねを谷川の石の中に置き、全能者があなたのこがねとなるならば、その時、あなたは全能者を喜び、神に向かつて顔を上げる事ができる。あなたが彼に祈るならば、彼はあなたに聞かれる。そしてあなたは自分の誓いを果たす」¹⁴¹と言う。「彼は高ぶる者を低くされるが、へりくだるものを救われる。彼は罪のない者を救われるからだ」¹⁴²と言う。エリパズは、依然として、賞罰応報（主義）の考えを変えてはいなく、ヨブを悪人・罪人と見ていて、ヨブに神に祈ることを求める。

しかし、ヨブは、相変わらず、神と会えることを期待する。ヨブは、神に従い、その道を守り、その命令にそむくことなく、その言葉を胸に刻んだが、変わることなく、神は隠され

¹³⁶ 『ヨブ記』 第21章9節。

¹³⁷ 『ヨブ記』 第21章20節。

¹³⁸ 『ヨブ記』 第21章29節から31節。

¹³⁹ 『ヨブ記』 第21章34節。

¹⁴⁰ 『ヨブ記』 第22章4節から5節。

¹⁴¹ 『ヨブ記』 第22章23節から27節。

¹⁴² 『ヨブ記』 第22章29節。

ている。「そのみ座に至ることができるように。わたしは彼の前にわたしの訴えをならべ、口をきわめて議論するであろう。わたしは、わたしに答えられるみ言葉を知り、わたしにいわれるところを悟ろう。彼は大きい力をもって、わたしと争われるであろうか、いな、かえってわたしを顧みられるであろう。かしこでは正しい人は彼と争うことができる。そうすれば、わたしはわたしをさばく者から永久に救われるであろう」¹⁴³と訴え懇願する。しかし、まだヨブには神は隠されており、相変わらず神に会うことができている。つまり、ヨブは神を求めるが、神は隠されている。

ヨブは、神の怒りに恐れをなし、「神はわたしの心を弱くされた。全能者はわたしを恐れさせた。わたしは闇に閉じ込められ、暗黒がわたしの顔をおおった」¹⁴⁴と苦悩している。

また、神を知る者がさばきの日を見ないことを嘆いて、悪しき人¹⁴⁵が栄え、神は弱い者や貧しい者ではなく、強い者に力を注いでいると言う、「町の中から死のうめきが起り、傷ついた者が助けを呼び求める。しかし神は彼らの祈りを顧みられない。光にそむく者たちがある。彼らは光の道知らず、光の道に止まらない。人を殺す者は暗いうちに起き出、弱い者と貧しい者を殺し、夜は盗びととなる」¹⁴⁶と訴える。「しかし神はその力をもって、強い人々を生きながらえさせる。彼らは生きる望みのないときにも起きあがる。神が彼らに安全を与えられるので、彼らは安らかである。神の目は彼らの道の上にある」¹⁴⁷と言う。ヨブは、神が悪人を生きながらえさせている、彼らに安全を与えていることを嘆く。「もし、そうでないなら、だれがわたしにその偽りを証明し、わが言葉のむなしいことを示しうであろう」¹⁴⁸と結ぶ。

第5節 ヨブの確信

ヨブは、彼に力を与え、知恵と悟りを示した友に対して、「あなたはだれのたすけによって言葉をだしたのか。あなたから出たのはだれの霊なのか」¹⁴⁹と言う。ヨブは、神の創造における力を例示し、「見よ、これらはただ彼の道の端にすぎない。われわれが彼について聞くところはいかにかすかなささやきであろう。しかし、その力のとどろき至っては、だれが悟る

¹⁴³ 『ヨブ記』第23章4節から7節。

¹⁴⁴ 『ヨブ記』第23章26節から27節。

¹⁴⁵ 悪人として、境を移し家畜を奪う者、孤児の驢馬を奪う者、やもめの牛を質にする者、貧しい者を道から押し除ける者を旧約聖書ではあげている。盗人や、やもめや貧者などの弱者に対して非情なる行為を行う者は悪人とされている。

¹⁴⁶ 『ヨブ記』第24章12節から14節。

¹⁴⁷ 『ヨブ記』第24章22節から23節。

¹⁴⁸ 『ヨブ記』第24章25節。

¹⁴⁹ 『ヨブ記』第26章4節。

ことができるか¹⁵⁰と賛美する。ヨブは、神の力を人間には悟れない力と信じ、彼の三人の友の戒めなどは、決して神の言葉でなく、人間の口から出たものと決めている。

ヨブは、自身の潔白を主張し、三人の友が悪人あるいは不義人のように考えていることを呪って、「わたしは断じて、あなたがたを正しいとは認めない。わたしは死ぬまで潔白を主張してやめない。わたしは堅くわが義を保って捨てない。わたしは今まで一日も心に責められたことがない。どうかわたしの敵は悪人のようになり、わたしに逆らう者は不義なる者のようになるように。神が彼を断ち、その魂を抜きとるとき、神を信じない者になんの望みがあるろう。彼は全能者を喜ぶであろうか、常に神を呼ぶであろうか¹⁵¹と言い切っている。悪人・罪人は神と会うことを望まないが、ヨブ自身が神に会うことを強く求めていることから、自身の潔白を説き明かしている。

第6節 ヨブによる潔白の誓い¹⁵²

6.1 ヨブによる12項目の誓い

ヨブによって立てられた潔白の誓いは、以下の十二項目の誓いである。ヨブが神に誓う「この世」での倫理である。

第一に、「わたしは、わたしの目と契約を結んだ、どうして、おとめを慕うことができようか¹⁵³。眼と契約を結んで、目に義務を負わせ、誘惑を体内に入れさせないようにする¹⁵⁴ことを意味し、これは、好色の問題である。

第二に、「もし、わたしがうそと共に歩み、わたしの足が偽りに向かって急いだことがあるなら、正しいはかりをもって量れ、そうすれば神はわたしの潔白を知られるであろう¹⁵⁵。これは、虚偽の問題である。

第三に、「もしわたしの歩みが、道をはなれ、わたしの心がわたしの目にしたがって歩み、わたしの手に汚れがついていたなら、わたしのまいたのを他の人が食べ、わたしのために成長するものが、抜き取られてもかまわない¹⁵⁶。これは、貪欲の問題である。

¹⁵⁰ 『ヨブ記』第26章14節。

¹⁵¹ 『ヨブ記』第27章5節から10節。

¹⁵² 関根正雄訳『ヨブ記』（岩波文庫）32章の表題として、「潔白の誓いと神への挑戦」とある。ここでは、その訳を参考にして、この節に「ヨブの潔白の誓い」と表題を付した。

¹⁵³ 『ヨブ記』31章1節。

¹⁵⁴ この部分は、前出書『ヨブ記』（関根正雄訳）の註釈（202ページ12行目）からの引用である。また『創世記』（3章6節）には、「女がその木をみると、それは食べるに良く、目には美しく、賢くなるには好ましいと思われから、その実を取って食べ」たとある。聖書では、欲望は目から入ってくると考えているようである。

¹⁵⁵ 『ヨブ記』第31章5節から6節。この部分は、『聖書』（新共同訳）では、『ヨブ記』第31章6節は、「正義が秤として量ってもらいたい。神にわたしの潔白を知っていただきたい」となっている。

第四に、「もし、わたしの心が、女に迷ったことがあるか、またわたしが隣の人の門で待ち伏せしたことがあるなら、わたしの妻が他の人のためにうすをひき、他の人が彼女の上に寝てもかまわない。これは重い罪であって、さばき人に罰せられるべき悪事だからである」¹⁵⁷。

これは、姦淫の問題である。

第五に、「わたしのしもべ、また、はしためがわたしと言い争ったときに、わたしがもしその言い分を退けることがあるなら、神が立ち上がられるとき、わたしはどうしようか、神が尋ねられるとき、なんとお答えしようか」¹⁵⁸。これは、奴隷の権利の無視の問題である。

第六に、「わたしが貧しい者の願いを退け、やもめの目を衰えさせ、あるいはわたしひとりで食物を食べて、みなしごに食べさせないことがあるなら、（わたしは彼の幼いときから父のように彼を育て、またその母の胎を出たときから彼を導いた。）もし着物がなかったために死のうとする者や、身をおおう物がない貧しい人をわたしが見た時に、その腰がわたしを祝福せず、また彼がわたしの羊の毛で暖まらなかったことがあるなら、もしわたしを助ける者が門におるのを見て、みなしごにむかってわたしの手を上げることがあるなら、わたしの肩骨が、肩から落ち、わたしの腕が、つけ根からおられてもかまわない」¹⁵⁹。これは、貧者への無情の問題である。

第七に、「わたしがもし金をわが望みとし、精金をわが頼みと言ったことがあるなら、わたしもしわが富の大いなる事と、わたしの手に多くの物を獲たことを喜んだことがあるなら」¹⁶⁰、これもまたさばき人に罰せられる悪事である¹⁶¹。これは、富に頼り、神よりも富を頼る心の問題である。

第八に、「わたしが日の輝くの見、また月の照りわたって動くのを見たとき、心ひそかに迷って、手に口づけしたことがあるなら、これはまたさばき人に罰せられるべき悪事だ。わたしは上なる神を欺いたからである」¹⁶²。これは、迷信に惑わされた問題である。

第九に、「わたしがもしわたしを憎む者の滅びるのを喜び、また災いが彼に臨んだとき、勝ちほこることがあるならば、わたしはわが口に罪を犯させず、のろいをもって彼の命を求めるとはしない」¹⁶³。これは、敵に対する憎しみの問題である。

第十に、「わたしがもし人々の前にわたしのとがをおおい、わたしの悪事を胸の中にかくした

¹⁵⁶ 『ヨブ記』 第31章7節から8節。

¹⁵⁷ 『ヨブ記』 第31章9節から11節。

¹⁵⁸ 『ヨブ記』 第31章13節から14節。

¹⁵⁹ 『ヨブ記』 第31章16節から18節。

¹⁶⁰ 『ヨブ記』 第31章24節から25節。

¹⁶¹ 『ヨブ記』 第31章26節がその28節に続くと考えられるのも自然であると解釈し、その一節を挿入した。

¹⁶² 『ヨブ記』 第31章26節から28節。

¹⁶³ 『ヨブ記』 第31章29節から30節。

ことがあるなら、わたしが大衆を恐れ、宗族の侮りにおちて、口を閉ざし、門を出なかったことがあるなら」¹⁶⁴と言い、それを否定している。これは、罪の隠蔽の問題である。

第十一に、「もしわが田畑がわたしに向かって呼ばわり、そのうねみぞが共に泣き叫んだことがあるなら、もしわたしが金を払わないでその産物を食べ、その持ち主を死なせたことがあるなら、小麦の代わりにいばらが生え、大麦の代わりに雑草が生えてもかまわない」¹⁶⁵。これは、畠の濫用の問題である。

第十二に、「もしわたしの天幕の人々で、『だれか彼の肉に飽きなかった者があるか』と、言わなかったことがあるなら、他国人はちまたに宿らず、わたしはわが門を旅人に開いた」¹⁶⁶。これは、客人への非情の問題である。

ヨブは、「ああ、わたしに聞いてくれる者があればよいのだが、わたしのかくはんがここにある。どうか、全能者がわたしに答えられるように。ああ、わたしの敵の書いた告訴状があればよいのだが。わたしは必ずこれを肩に負い、冠のようにこれをわが身に結び、わが歩みの数を彼に述べ、君なる者のようにして、彼に近づくであろう」¹⁶⁷と言う。

6.2 好色の問題

前項6.1で検討した戦士ヨブの第一あるいは第四の誓いの内容を、エラスムスの『エンキリディオン』での救済策と関連づけて考察し、好色という悪徳が経済行為との関連でどのように提示されるかを考察する。エラスムスは、好色について「醜い好色の罪」¹⁶⁸であると見做し、「好色は最大の、また最も多数の罪」¹⁶⁹とつねに結びついている」¹⁷⁰と説明している。これらの多数の罪は、好色によって誘発された悪である、あるいは好色から派生した悪徳である。神によって創造された人間を多くの家畜のうちの最も「無感覚の生き物に等しくするこの肉欲」¹⁷¹は、不潔で汚れていて「どんな人にもいかに嫌悪すべき」ものである、とエラスムスは言う。「一時的な肉欲の醜い快感」¹⁷²によって、魂と身体を同時に辱め、「キリストがご

¹⁶⁴ 『ヨブ記』第31章33節から34節。

¹⁶⁵ 『ヨブ記』第31章38節から40節。

¹⁶⁶ 『ヨブ記』第31章31節から32節。

¹⁶⁷ 『ヨブ記』第31章35節から37節。

¹⁶⁸ 前掲書『エンキリディオン』第33章156ページ9行目。

¹⁶⁹ エラスムスは、多数の罪を挙げている。たとえば、売春婦を求めることは、両親に聴き従わない、友人を無視する、父の財産を浪費する、他人のものをひったくる、偽誓する、痛飲する、強盗する、悪事を働く、生死をかけて戦う、殺害する、冒瀆するなどの重い罪に結びついていると言う（前掲書『エンキリディオン』第33章158ページ13行目から16行目参照）。

¹⁷⁰ 前掲書『エンキリディオン』第33章158ページ13行目。

¹⁷¹ 前掲書『エンキリディオン』第33章156ページ10行目から11行目。

自身の血をもって神聖なものとなしたもうた宮を冒瀆する』¹⁷³のは、人間の尊厳を貶める、ひどい精神錯乱であると言う。

エラスムスは、同時に、好色が多くて悪を身に引き起こすと説明している。好色の評判は「薄汚い悪臭」¹⁷⁴を放つ悪徳であるから、真っ先に「名声」¹⁷⁵を奪い去り、それは相続した資産を食い尽くし、さらに「身体の力と美観」¹⁷⁶を奪ってしまい、健康を傷付け、「ぞっとするような無数の病気」¹⁷⁷を生み出し、「天性の旺盛な力を取りのぞき、精神の鋭さを鈍化させ、けもののような気質」¹⁷⁸を植え付ける、と説明している。そして、どんなに立派な人でも全身を汚物の中に沈めるため、「ただ下品で賤しく汚いことしか」¹⁷⁹考えず、人間に固有の「理性の使用を抹殺」¹⁸⁰することを嘆いている。それは、「青年時代を狂気じみた、恥ずべきで、憎むべきものとし、老年を醜く、悲惨にする」¹⁸¹とも言っている。

次に、エラスムスが嘆いている人間の情念としての好色が個人の行為として経済学においてどのように表されるかを考察してみよう。戦士ヨブならびにエラスムスが悪徳として日常生活で忌避することを説いている好色の問題を経済学においてどのように扱うことができるのであろうか。経済学は、一般的に、合法的な取引行為を取り扱う学問であるので、そのため、好色は違法行為あるいは疑似違法行為であるので、経済学ではこの問題を最初から無視してきた感がする。敢えてこの問題を経済学において取り扱うとしたならば、好色行為が個人の効用に影響し、同時に、個人の予算制約式に好色費用として組み入れることになることを説明して見よう。

個人の好色行為は、その所得に影響する。その個人の所得（予算）制約は、

$$y = w(L - H(b)) - \alpha \quad (1)$$

と表されるであろう。ここで、 y は取引期間内で獲得される所得、 L は労働サービス水準、 w は労働サービスの価格（影の価格）、 $H(\cdot)$ は好色費用関数であり、 b は好色数量（頻度）である。好色の数量（回数）が増えるにつれて、好色費用が増加すると仮定される¹⁸²。好色行

¹⁷² 前掲書『エンキリディオン』第33章156ページ末。

¹⁷³ 前掲書『エンキリディオン』第33章156末から157ページ1行目。

¹⁷⁴ 前掲書『エンキリディオン』第33章157ページ3行目。

¹⁷⁵ 前掲書『エンキリディオン』第33章157ページ3行目。

¹⁷⁶ 前掲書『エンキリディオン』第33章157ページ4行目。

¹⁷⁷ 前掲書『エンキリディオン』第33章157ページ4行目。

¹⁷⁸ 前掲書『エンキリディオン』第33章157ページ5行目から6行目。

¹⁷⁹ 前掲書『エンキリディオン』第33章157ページ5行目。

¹⁸⁰ 前掲書『エンキリディオン』第33章157ページ9行目。

¹⁸¹ 前掲書『エンキリディオン』第33章157ページ9行目から10行目。

¹⁸² このことは、 $H'(\bullet) > 0$ が仮定される。というのは、醜い好色の罪が自身を苦しめるためである。自分が豚、

為は労働時間を減少させることによって、個人の所得（収入）水準を引き下げる。そのことをH関数で示した。また、 $\alpha > 0$ は、自身の資産（財産）を食い尽くしによって発生する、直接的に減少する所得（好色に投下する費用）の大きさである。エラスムスによると、好色は、名声を損ない¹⁸³、相続した資産を食い尽くし、身体の力と美観を同時に奪い¹⁸⁴、健康を傷付け、ぞっとするような無数の病気を生み出し¹⁸⁵、ただ下品で賤しく汚いことしか考えなくなり、理性の使用を抹殺する事になる。これらは、好色が彼の収入（所得）に与える負の波及効果（スピルオーバー）である。たとえば、個人の名声を損なうことによって、その個人は所得を得る機会を失うかもしれない。また、先祖からの名声を好色を重ねることによって失うかも知れない。また、好色行為によって身体の力と美観を失い、健康を傷付けることによって労働する体力や気力を失うかもしれない。この波及する所得獲得機会を失う影響は一種の機会費用である。これは、好色行為によって誘発された費用である。

ゆえに、個人の好色行為は、直接的な費用と誘発された費用（派生費用）から構成される。個人の好色行為の費用関数は、

$$H(b) = \beta(b) + \delta(d(b)) \quad (2)$$

と定式化される。この(2)式は、個人の好色行為に伴う費用を示しているが、その費用は、好色によって生じる直接費用と派生費用からなる。ここで、 $\delta(d(b))$ は、好色によって派生する費用関数であり、また $\beta'(\bullet) > 0, \delta'(\bullet) > 0$ と仮定される¹⁸⁶。この $d(b)$ 関数は、派生費用関数で、 d は好色によって誘発される効果である。

個人の満足（効用）は、消費する財やサービスの水準に依存する、同時に、好色行為にも依存している。個人の効用関数は、

$$U = u(c, b) = u_1(c) + u_2(b) \quad (3)$$

と表される。ここで、 $u'_k(\bullet) > 0 (k=1,2)$ であり、好色家の効用関数は、加法分離型であると考えられる。つまり、財・サービスの消費量が増えても好色からの満足（効用）には影響することはなく、また好色行為も財やサービスの効用には影響しないことを仮定している。よっ

野獣の中の最も無感覚な生き物になったと感じ、自身を不潔であり、嫌悪すべきものとする。

¹⁸³ エラスムスは、前掲書『エンキリディオン』第33章157ページの3行目から4行目において、「好色の評判以上に薄汚い悪臭をはなつ悪徳」はないからであると言う。

¹⁸⁴ 前掲書『エンキリディオン』第33章157ページの4行目参照。

¹⁸⁵ 前掲書『エンキリディオン』第33章157ページの4行目から5行目参照。

¹⁸⁶ ここで、 d が、名声を損ない、相続した資産を食い尽くし、身体の力と美観を同時に奪い、健康を傷付け、ぞっとするような無数の病気を生み出し、ただ下品で賤しく汚いことしか考えなくなり、理性の使用を抹殺する事などによる影響を示している。 d の水準があがると、好色派生費用が増加する。

て、(3)式は、強い意味において、財やサービスの水準(c)と好色行為の水準(b)とは分離可能であると仮定している。エラスムスは、好色の満足を「一時的な肉欲の醜い快感」と言っている。エラスムスは、(3)式の効用関数を一時的な効用関数であると想定していた。

個人が予算制約の下で行動するとき、以下の関係が得られるとしよう。すなわち、

$$p_c c + p_b b \leq y \quad (4)$$

である。ここで、 $y = w(L - H(b)) - \alpha$ である。個人の好色行為は、(3)式で示される効用（エラスムスの概念では快楽あるいは快適さ）を(4)式と(1)式の制約の下で満たすことになる。

エラスムスが訴えているように、好色は、一時的に満足をもたらすとしても、「醜い好色の罪」は否定できない。好色行為の派生費用が、ここで示した $d(\cdot)$ 関数だけではなく、社会的関連費用も加えられると、エラスムスの「好色は最大の、また最も多数の罪とつねに結びついている」という嘆きを社会科学の分野でも検討する意義がある。

6.3 貪欲の問題

戦士ヨブの第三あるいは第七の誓いの問題は、個人の貪欲に関わる行為の問題である。エラスムスは、人間の貪欲を悪徳であると見て、「富を所有することではなくて、富を蔑視することが真に偉大」¹⁸⁷であると断言する。多くの人々は「必要という名目で自分の欲望」¹⁸⁸の言い訳をし¹⁸⁹、「人は必要なものを自然の必要によってではなく、欲望の目標によって量っている」¹⁹⁰と言う。敬虔な人には、「少なすぎる程度で十分である」¹⁹¹とエラスムスは言う。

戦士ヨブならびにエラスムスの貪欲行為は、経済学における個人の行為として表されるのであろうか。エラスムスは、人間の欲望に飽和点を置き、富める者はすでに飽和点に至っていることことを前提にしているのであろう。というのは、「自然の必要」¹⁹²が人間の欲望であり、これ以上の欲望は、「欲望の目標」によって測られ、自然以上の欲望の領域を「貪欲」と

¹⁸⁷ 前掲書『エンキリディオン』第33章164ページ5行目から6行目。

¹⁸⁸ 前掲書『エンキリディオン』第35章164ページ14行目。

¹⁸⁹ 前掲書『エンキリディオン』第35章164ページ15行目において、福音書の譬話を提示している。

¹⁹⁰ 前掲書『エンキリディオン』第35章165ページ2行目。エラスムスは、富を蔑視しているのではなく、欲望の目標で必要性を量っていることを攻撃している。敬虔な人には、自然によって与えられる程度で十分であると考えている。

¹⁹¹ 前掲書『エンキリディオン』第35章165ページ2行目から3行目。

¹⁹² エラスムスは、前掲書『エンキリディオン』第35章164ページ15行目において、「その日暮らしの野の百合と空の鳥」を示している。また、『マタイ福音書』（6章28節）に、「空の鳥を見るがよい。まくことも、刈り取ることもせず、倉に取り入れることもしない。それなのに、あなたがたの父は彼らを養って下さる」とある。ここにエラスムスは、「自然な必要」を見ている。その日暮らしをする野の鳥を引き合いに出している。

捉えている。個人が「自然の必要」を超えると、その欲望は飽和状態に達し、富の獲得は、その人を快ではなく、むしろ不快にすると想定している。飽和点以上になると満足（効用）が低下することを仮定している。

さらに、エラスムスは、富の与える快適あるいは快楽（経済学の効用に対応していると思なされるが）について考察している。エラスムスは、富は最高善¹⁹³（唯一の善であるキリスト）に至るための手段であると想定し、精神を最高善（キリスト）に向ける手段として富を利用することを説いている。富は、人間自身の外部にあり、これ以上つまらぬ快適を与えるものではなく¹⁹⁴、また富の所有によって、賢くなり、教養あるものになり、健康的にいつそ美しくすることはない¹⁹⁵と言う。個人にとって富は、諸々の快楽を準備しているが、しかし、「死をもたらす快楽」¹⁹⁶を準備している。ここでエラスムスが言うところの「諸々の快楽」とは、今日の経済学では、財やサービスによってもたらされる効用水準に対応している。

富める人の効用関数は、

$$U=u(c) \quad u'(\bullet)>0 \quad (6a)$$

と表され、ここで、 c は、財やサービスの水準であり、 \bar{U} は効用水準が飽和水準の状態を示している。その水準以上になると、個人の効用水準が増加せずむしろ低下傾向になることが想定される。エラスムスは効用水準に飽和点があると考えている。この点が今日の経済学の想定と異なる点であるが。富は、個人が財やサービスを獲得することを容易にする。「この世」では、

$$p_c c \leq M \quad (7)$$

と言う関係が成立する。ここで、 M が富（所得）を示している。(6a)式と(7)式から、富（所得）が増えると、快楽水準（効用水準： U ）が上げられる。(6a)式と(7)式で個人の行動を定式化して示されると、エラスムスの説く名声は個人の経済行動に影響しないことになる。

以下では、富（所得）が名声に影響し、個人の効用に影響することを考察してみよう。富は、名誉を得させるが、しかし「馬鹿者だけが驚嘆し」¹⁹⁷、この人達に気に入られるとしても、

¹⁹³ エラスムスは、最高善（すなわち徳義）として、「すべての人に対し善を欲すること、友人を誠実に援助すること、悪徳を憎むこと、敬虔な談話を歓ぶこと」を挙げている（前掲書『エンキリディオン』第13章70ページ17行目から18行目参照）。

¹⁹⁴ 前掲書『エンキリディオン』第35章165ページ17行目参照。エラスムスは、精神の徳のみが人間自身の内部にあると考えているようである。

¹⁹⁵ 前掲書『エンキリディオン』第35章165ページ19行目。エラスムスは、富を蔑視しているのではなく、富のもたらす快楽に警戒している。死に導く快楽を恐れ、攻撃している。

¹⁹⁶ 前掲書『エンキリディオン』第35章166ページ1行目。

実際には、間違った名誉を与えている。「真の名誉は称賛されている人たちによって称賛されていることであり、最高の名誉はキリストに気に入られる」¹⁹⁸ ことであるとエラスムスは断言する。すなわち、「真の名誉は富の報酬ではなく、徳の報酬」¹⁹⁹ であると言っている。

エラスムスによると、名誉（名声）は、徳によって与えられることになる。このことは、

$$F=f(v) \quad f'(\bullet)>0 \quad (8)$$

と名誉（名声）関数が示されることを含意している。(8)式において、 v は徳、 F が名誉（名声）を示している。この式においては、高い徳は名誉（名声）を上げることを示している。富の名誉（名声）に影響するメカニズムは(9)式の徳を通すところにある。経済学では、「技術的な外部性」として説明しているものである。富が徳に影響を与えるならば、

$$v=v(M) \quad (9)$$

と表現される。富の水準が上昇すると、徳が増加するかどうか検討してみよう。(9)式を(8)式に代入すると、

$$F=f(v(M)) \quad (8a)$$

が得られる。

富の水準が上昇すると、徳が増加するかどうか検討してみよう。(8a)式ならびに(9)式において、 $v'(M)>0$ であるならば、富が徳を高め名声を高める。このとき、富は名声に「技術的な外部経済」を与えている。しかし、一般的には、富が名声を損なう場合も排除されないが、ここでは富の名声に与える「技術的な外部不経済」はないと想定しよう。

富が直接的に名声（名誉）を高めるならば、名声（名誉）関数は、

$$F=f(v,M) \quad (8b)$$

と表されると想定されるかもしれない。ここで、 $f'_v(\bullet)>0, f'_M(\bullet)\geq 0$ と想定される。富水準の上昇が直接的に名声（名誉）を上げるかどうかは、エラスムスによると、キリストを受け入れているか否かどうかに関わっている。

もし行為者がエラスムスの規定する「馬鹿者」あるいは「愚かな者」²⁰⁰であるならば、名声関数は(8b)式で表されるであろう。富自体が「この世」での名声を引き上げると考えている

¹⁹⁷ 前掲書『エンキリディオ』第35章166ページ2行目。

¹⁹⁸ 前掲書『エンキリディオ』第35章166ページ4行目から5行目。

¹⁹⁹ 前掲書『エンキリディオ』第35章166ページ3行目。

²⁰⁰ 前掲書『エンキリディオ』第35章166ページ6行目。

個人の効用関数である。しかし、エラスムスは、この名声（名誉）を「いやしい奴ら」²⁰¹が「おもねって譲り」服従することによってもたらされる名声（名誉）であり、「あなた自身に感嘆しているのではない」と断定する。

エラスムスによると、真の名声・名誉について、先に示したように「真の名誉は称賛されている人たちによって称賛されていることであり、最高の名誉はキリストに気に入られる」ことである。エラスムスによると、富は、「この世」の名声（名誉）を高めることを通して、その快適さ（効用）を高めると想定される。そのために(8a)式の名声関数が想定される。(8a)式の名声関数が想定されると、(6a)式で与えた個人の効用は、

$$U = u(c, F) \quad u'_c(\bullet) > 0, \quad u'(\bullet) \leq 0 \text{ for } c \geq \bar{c} \quad u'_F(\bullet) > 0 \quad (6b)'$$

と変更される。ここでは、

$$F = f(v(M)) \quad f'_v(\bullet) > 0 \quad (8a)$$

が成立している。エラスムスの個人にとっては、飽和点に至ると、富が増加しようとも、財やサービスから得られる満足は増加しない。上の(6b)'式では、名声（名誉）が高まると、快適さ（経済学での効用水準）が高まることが示されている。(6b)'式と(8a)式で表される個人は、「真の名誉は称賛されている人たちによって称賛されていることであり、最高の名誉はキリストに気に入られる」個人である。

この個人の経済行為は、個人の効用関数と予算制約式で与えられる。その効用関数は

$$U = u(c, v(M)) \quad u'_c(\bullet) > 0, u'(\bullet) \leq 0 \text{ for } c \geq \bar{c} \quad u'_v(\bullet) > 0 \quad (6b)'$$

となる。その予算制約式は、

$$p_c c \leq M \quad (7)$$

となる。この個人の効用水準が飽和水準に達すると、富（所得）の増加は、財やサービスから得られる満足は、増加せずむしろ低下傾向になることになる。徳を通した名声の効果のみが効用水準を引き上げる。

また、エラスムスによると、「馬鹿者」あるいは「愚かな者」は、名声（名誉）関数が(8b)式で表されると勘違いしているので、(6b)'式および(8b)式に対応する効用（快適）関数は、

$$U = u(c, F) \quad u'_c(\bullet) > 0, u'_F(\bullet) > 0 \quad (6b)$$

²⁰¹ 前掲書『エンキリディオン』第35章166ページ5行目。

となる。ここでは、

$$F=f(v,M) \quad (8b)$$

となるであろう。(6b)式と(8b)式で示される個人は、「この世」の個人の経済行動を示す。富が増加すると、財とサービスから得られる満足も増加し、名声も高まり（しかし徳が高まるかどうかは不明であるが）、効用水準は高まる。

エラスムスは、富（所得）が友を与え、その個人の効用を高めることがあることを示唆している。富あるいは財産は、友達を与えるかどうかについて考察してみよう。富（所得）を持っている/得ている個人が、他の個人から好意を懐かれ、愛情を持たれると考えられるならば、富んでいる人の快適さ（効用）は上昇すると想定できる。このとき、個人の好意（愛情）関数は、

$$l=l(M) \quad (6c)$$

と示される。ここで、 l は好意（愛情）を表し、 $l(M)$ 関数は、好意（愛情）が富（所得）に影響されることを示している。しかし、富が増加すると、他人に対する愛情が深くなるであろうか。これについては、エラスムスは否定的である。富める人には、「すべての人は腐肉に食いつく禿鷹であり、貯えにたかってくるはえである」²⁰²とエラスムスは断言する。また、愛情深いふりをしている人は、「富める人が早く死ぬようと祈っている」²⁰³と言う。だれも富める者に死んでほしくないと思うほどには「愛していない」²⁰⁴と言う。たとえ富める人を誠実に愛しする人が万一いるとしても、「富める者はその人に不信の念を持たざるを得ない」²⁰⁵とエラスムスは言う。このことから、エラスムスによると、富（所得）が好意（愛情）を育み、快適（効用）をもたらすという見解は、「虚偽であり、幻影であり、ごまかしである」²⁰⁶ということになる。このエラスムスの場合には、

$$l'(M) \leq 0 \quad (10)$$

が想定される。富が増加すると、富あるいは財産の快適（効用）に与える効果は、

²⁰² 前掲書『エンキリディオン』第35章（貪欲を刺激するものにたいして）166ページ17行目から18行目。

²⁰³ 前掲書『エンキリディオン』第35章（貪欲を刺激するものにたいして）166ページ14行目から15行目。

²⁰⁴ 前掲書『エンキリディオン』第35章（貪欲を刺激するものにたいして）166ページ15行目から16行目参照。

²⁰⁵ 前掲書『エンキリディオン』第35章（貪欲を刺激するものにたいして）166ページ16行目から17行目。

²⁰⁶ 前掲書『エンキリディオン』第35章（貪欲を刺激するものにたいして）166ページ19行目。

$$U = u(c, \ell) \quad uc'(c, \ell) \geq 0, u'(c, \ell) \leq 0 \text{ for } c \geq \bar{c}, u_{\ell}'(c, \ell) > 0 \quad (11)$$

ここで,

$$\ell = \ell(M) \quad \ell'(M) \leq 0 \quad (6c)$$

と示される。(6c)式の好意(愛情)関数から、富が増加すると、好意(愛情)の水準が低下し、効用水準が低下する²⁰⁷。

先に検討してきた富の名声に与える影響も組み込んだ個人の行動を定式化すると、個人の効用関数は、

$$U = u(c, v(M), \ell(M)) \quad u'_{\ell}(c, v, \ell) > 0, u'_{\nu}(c, v, \ell) > 0, u'_{\ell}(c, v, \ell) > 0 \quad (6d)$$

となる。予算制約式は

$$p_c c \leq M \quad (7)$$

で与えられる。ここで、富(所得)が増加すると、飽和点に足していなくとも、個人の効用が上昇するかどうかは不明である。もし個人が財とサービスに関して飽和状態にあるなら、富の増加はむしろ効用水準を低下させるかもしれない。

エラスムスの見解をまとめると、「富は心のすべての平静—これにまさって甘美なものは人間にはないのですが—を幾千もの憂慮をもって引き裂く」²⁰⁸、また「富は渴きを決して鎮めないし、かえってますます渴きを刺激し、すべての罪業に頭から飛び込ま」せることになる²⁰⁹。実際、エラスムスは、「神とマモン(財神)に同時に仕えることはできません」²¹⁰と結んでいる。エラスムスは、個人が財とサービスに関して飽和状態にあり、富が名声を高めるとしても、好意(愛情)を低下させ、総合的に満足(効用)水準を低下させると断定している。

6.4 奴隷、貧者、客人ならびに敵の問題

6.1項で示した戦士ヨブの第五、第六、第九および第十二の問題を個人の行為の観点から

²⁰⁷ 前掲書『エンキリディオン』第35章(貪欲を刺激するものに対して)167ページ1行目に、富の収支を計算すると、「多くの不利益を引きよせている割には、決して利益をそれほど多くもたらさないことが」わかる、とある。これは、富は快適さを損なう(効用を引き下げる)。

²⁰⁸ 前掲書『エンキリディオン』第35章(貪欲を刺激するものに対して)167ページ5行目から7行目。

²⁰⁹ 前掲書『エンキリディオン』第35章(貪欲を刺激するものに対して)167ページ11行目から12行目にて、エラスムスは、「巨大な富というものは罪なくして決して獲得されないし、保たれない」とまとめている。

²¹⁰ 前掲書『エンキリディオン』第35章(貪欲を刺激するものに対して)167ページ15行目。ここで「マモン」とは富のことである。

検討してみよう。第五の奴隷の権利を無視することに関わる問題であるが、奴隷の権利を聞き入れることは、あるいは神によって創造された同等な人間として奴隷に接することは、奴隷を労働力として雇うときに同等者として奴隷と契約を結ぶことを意味している。雇用主が奴隷あるいは僕を雇うとき、権利において対等者として雇用契約を結ぶ。経済学のセンスで、この権利関係を説明すると、奴隷が労働サービスを雇用主に提供するとき、対等の権利・義務関係で契約を結び、そして労働サービスを提供する²¹¹。雇用主は、その労働サービスを雇用し、生産工程で活用する。雇用主の生産工程は、

$$y = \phi(E) \quad \phi'(\bullet) \geq 0 \quad (12)$$

と表されるとしよう。ここで、 y は生産物の数量、 E は労働契約によって使用可能にされる労働サービスの大きさである。ここで、 $E \leq L$ である。 L は一定期間内で利用可能な労働サービス量である。この式は、雇われる労働サービスが増加するにつれて、生産される生産物の数量が増加することを意味している。雇用主は、労働サービスをその労働力が売買される所で雇い入れる。その際に、雇用される労働サービスの量とその評価額について、奴隷（あるいは僕）と契約関係に入る。そのサービスの単位あたりの評価額を w とすると、

$$wE \leq C \quad (13)$$

と言う関係が成立する。ここで、大文字の C は、雇用主が工面する総生産費用である。雇用主は、(13)式を制約として、(12)式を最大にするように行動することができる。

次に、貧者に対する無情の問題あるいは客人への非情の問題²¹²について考察してみよう。貧者が身に纏う者がなく、食する食物に事欠くとき、また貧者（あるいは孤児あるいは客人）に住む家がなく、あるいは、泊まる宿がなく、着る者がなくときに、主食のご飯やパンを与え、その貧者（孤児あるいは客人）に雨露をしのげるように家屋を提供し、着るもの

²¹¹ 『マタイ福音書』第20章1節から15節には、ある家の主人が、自身の葡萄園に労働者を雇うために、一日1デリナで契約して労働サービスの提供を受ける状況が描かれている。その主人は、夜明けに労働者たちと一日一デリナで契約して雇う。それから、9時頃に他の人たちを一日一デリナで雇う契約をする。また、12時ごろと3時頃にも同じように契約し雇っている。さらに、5時頃にも一日一デリナで労働者たちを雇っている。

この話しは天国で神が主人として契約を結んでいる譬え話である。これは、神の国では公平と契約が実現していることの証である。このことを既に戦士ヨブは旧約時代に実現しようとしている。このヨブの契約は、今日の経済社会で行われている行為に相当するであろう。それをヨブは、自身も奴隷も神によって創造されたものであるとして、対等な契約関係を受け入れている。

²¹² 『出エジプト記』第23章9節に「あなたは寄留の他国人をしえたげてはならない。あなたがたはエジプトの国で寄留の他国人であったので、寄留の他国人の心を知っているからである」とある。この箇所は客人への非情な取りなしの問題である。

を提供し、食事を提供することを誓う戦士ヨブに、見返りもなく、財やサービスを他の市民に提供する、今日の市民の姿を見ることができる。

貧しい人に対する施しは、慈善行為あるいは無償援助という形態を取っている。これらは、見返りを求めない個人の行為である。ある個人の富(所得)を M で表す。これから、金額にして t の移転がある個人から他の個人になされるとしよう。このとき、移転支払を行う個人の富は、 $(M-t)$ に減少するが、移転収入を受ける個人の富は、 t だけ増加する。この移転が食物や衣服などの財やサービスでなされる場合もあるし、時には、住まいサービスの提供として行われたこともある。

この考えは、新約聖書に示されている神の国での恵みに類似した話しと理解できる。『マタイ福音書』第5章3節に、「このころの貧しい人たちは、さいわいである。天国はかれらものである」とある。これは、神の国を求める貧しい人々には、幸福の不死性(永遠の命)が与えられる。これは、神から貧しい人々に移転されるものが尽きないことを示している。

次に、敵に対する憎しみの問題について検討してみよう。自身を憎む者の滅びを喜ぶことがなく、災いとその敵に望んだとき勝ち誇らないこと²¹³は、一種のコスモポリタン精神、あるいは、今日の経済学では利他主義と呼ばれる考えである。利他主義の個人の快適(効用あるいは満足)水準は、

$$U_i = u_i(c_i, u_j) \quad (i \neq j) \quad u'_{c_i}(\bullet) > 0, u'_{u_j}(\bullet) \geq 0 \quad (14)$$

と表される。ここで、個人の快適(効用)水準は、その個人自身の財・サービスの消費、他の個人の快適さにも影響される。他の個人が快適になれば、自身の快適さも上がるのが想定される。ここでは、他の個人の効用 (u_j) が低下すると、自身の効用も低下する。個人は、相手(あるいは敵)の効用水準が

$$U_j = u_j(c_j, u_i) \geq \bar{U}_j > 0 \quad (15)$$

を満たすように自身の快適さを追求する。その際には、自身の所得水準が財・サービスの支出総額以下に抑えられる条件を満たしている。すなわち

$$p_c c \leq M \quad (16)$$

²¹³ 『ルカ福音書』第6章27節から29節には「敵を愛し、憎む者に親切にせよ。のろう者を祝福し、はずかしめる者のために祈れ。あなたの頬を打つ者にはほかの頬を向けてやり、あなたの上着を奪い取る者には下着をも拒むな」とある。

を満たしている。ここで小文字の c は、生産物の消費水準、 M は所得水準である。

慈善行為あるいは無償の援助をしている個人の経済行動を定式化する。この個人は、コスモポリタン精神、あるいは、今日の経済学では利他主義の行動をとる個人であるとしよう。この個人の効用関数は、

$$U_i = u_i(c_i, U_j) \quad (i \neq j) \quad u'_{c_i}(\bullet) > 0, u'_{u_j}(\bullet) \geq 0 \quad (14)$$

この個人は、

$$U_j = u_j(c_j, U_i) \geq \bar{U}_j > 0 \quad (15)$$

満たし、さらに、予算制約

$$p \cdot c \leq M - t \quad (16)'$$

を満たすように行動する²¹⁴。移転水準が増加すると、その個人の消費支出は低下し、その個人の効用水準を低下させるが、他方で移転を受ける他の個人の効用水準は上昇するので、(14)式で示されるコスモポリタン個人 (i) の効用水準が上昇するかどうかは確定し得ない。

6.5 畠の濫用の問題

この問題は、畠などの耕作に関する規定違反に関する問題である。これに関係する規定を旧約聖書に見てみよう。たとえば、『出エジプト記』第23章10節から11節には「あなたは6年のあいだ、地に種をまき、その産物を取り入れることができる。しかし、7年目には、これを休ませ、耕さずにおかなければならない。そうすれば、あなたの民の貧しい者がこれを食べ、その残りは野の獣が食べることができる」とある。また、『出エジプト記』第23章12節に「あなたは6日のあいだ、仕事をし、7日目には休まなければならない。これはあなたの牛および、ろばが休みを得、またあなたのはしための子および寄留の他国人を休ませるためである」とある。また、『レビ記』第19章19節に「あなたの畑に二種の種をまいてはならない」とある。

この問題は、耕地の生産性を維持するための規定であり、雇い主と被用者（奴隷や召使いなど）との間の暗黙の契約（約束）である。今日、耕地の生産性を維持し、それを上げる役割は、その所有者に委されているが、生産性を維持するために休耕地をもうけることなどは今日でも行われている。

²¹⁴ (11)式の効用関数と(6d)式の効用関数の整合性については、この稿では検討していない。両関数の整合性は、 M の取り扱いの問題である。

今日（ヨブ記の社会を超えた展開になるが）、耕地の生産性を高めるために、機械（耕地を耕し、刈り入れを助ける機械）が導入され、耕地の生産性を高める試みがなされている。いま、雇用主（耕作者）の生産工程は、

$$y = \phi(E, K) \quad \phi'_E(\bullet) \geq 0, \phi'_K(\bullet) \geq 0 \quad (12)'$$

と表されるとしよう。ここで、Kは耕作（工作）機械であり、この機械の台数（使用量）が増加すると、雇われている人の単位時間あたりの生産高（生産性）は上昇する。雇用主（あるいは耕作者）は、

$$wE + rK \leq C \quad (17)$$

を制約として生産物を生産している。ここでrは、レンタル（機械を賃貸する料金）であり、Kは耕作（工作）機械の使用（雇用）量²¹⁵である。

また、雇用主と被雇用者の契約は、規定（労働協定など）に記され履行される。これは、被雇用者の生産性（再生産力）を維持するためにも、労働時間や過酷な労働での酷使を避けることを協定に定めることは必要である。

なお、ヨブの誓いなかで、第八の迷信の問題については科学（社会科学）と宗教の問題として考察する必要がある。また、第十の罪の隠蔽の問題と第二の虚偽の問題は、交渉問題や神学問題として考察される必要があるために、別の機会に取り上げるのが適切であろう。

第7節 戦士ヨブ

7.1 神への挑戦

ヨブの神への挑戦であるが、「ああ、わたしに聞いてくれる者があればよいのだが、わたしのかきはんがここにある。どうか、全能者がわたしに答えてくれるように。ああ、わたしの敵の書いた告訴状があればよいのだが。わたしは必ずこれを肩に負い、冠のようにこれを身に結び、わが歩みの数を彼に述べ、君たる者のようにして、彼に近づくであろう」²¹⁶と言う。ここで、わたしのかきはんとは、前節で示した「ヨブの潔白な誓い」であり、わたしの敵と

²¹⁵ 『ヨブ記』が書かれた頃には、牛や驢馬が、このK（所謂、資本）に、相当すると思われる。『ヨブ記』が書かれた時代は、はっきり解明されていないが、前掲書『ヨブ記—その今日への意義—』（二（ヨブ記の構造））の8ページ15から9ページ2行目には「ギリシャ文化がパレスチナに次第に浸透した時代、紀元前三世紀、四世紀と見る見方もあるが、それより今少しく早いじだいではないか」とある。

²¹⁶ 『ヨブ記』第31章35節から37節。この35節の「かきはん」とは、『ヨブ記』（関根正雄訳）の註釈（204ページ）において、「潔白を誓ってこれを文書とし判こを押して保証する」意味に解釈している。

は、神と解釈される。神の書いた「告訴状」を肩に背負った論争は一種の裁判²¹⁷であろう。ヨブは、王のようにして神と戦おうとしている。これに対して、『ヨブ記』第38章2節において、神はヨブに応答し、「無知の言葉をもって、神の計りごとを暗くしているこの者はだれか」²¹⁸と切り出している。「あなたは腰に帯して、男らしくせよ。わたしはあなたに尋ねる、わたしに答えよ」²¹⁹と言って、神はヨブに挑戦している。

神は、ヨブの訴えに直接答えるのではなく、神の天地創造の業をヨブに語っている。これは神の創造を通して、神自身の威力を知らせ、ヨブを沈黙させることをたくらんでいるのかも知れない。はじめに、神が大地を据えたとき、ヨブはどこにいたかと問う。大地の広がりや容積を決め、その長さを測る縄を張ったのは誰かと問い、同様の問いがヨブに向けられる。大地の土台や隅石は誰が置いたのか。海の水が母なる大地より湧き出たとき、それを扉によって閉じ込めたのは誰か²²⁰。誰が朝に命じ、太陽の昇る所を夜明けに知らせ、神は「これに地の縁をとらせ、悪人をその上から振り落とさせたことがあるか」²²¹と問うている。光が大地を照らすと、闇が消え、「地は印せられた土のように変わり、衣のようにいどころられる」²²²と言い、神の力の偉大さを誇っているかのようなのである。

次に、神は地の広がりや深さについてヨブに尋ねる。海の源、淵の底、陰府の入り口を見たか²²³、光の道と暗闇の住まいを知り、光を暗闇の境まで連れて行けるか、暗闇のすみかに至る道を知っているかと尋ねる。神にはこのことができるかとヨブに答えているようである。

神の挑戦は、天候や天空などの自然現象に関する問いに進む。これらについても神の力を明らかにし誇示される。神は、天候や天空の自然現象が神の制御のもとにあることをヨブに知らしめている。雪²²⁴、雹（あるいは霰）²²⁵、光、風、雨²²⁶、霜²²⁷、露²²⁸、氷²²⁹などの現象も

²¹⁷ 前掲書『ヨブ記』（関根正雄訳）の註釈（204ページ）では、神明裁判の考えを持っていると記述している。

²¹⁸ 『ヨブ記』第38章2節。

²¹⁹ 『ヨブ記』第38章3節。ここで、「腰に帯する」とは、浅野順一著『ヨブ記—その今日への意義—』（162ページ）によると、「出陣の姿勢をとり、その用意をする」ことである。また、「男らしく」は、同書では、「勇士」「戦士」と語源を等しくし、従って力強い人」とある。

²²⁰ 『ヨブ記』第38章11節に、「言った、『ここまで来てもよい、越えてはならぬ、おまえの高波はここでとどまるのだ』と」ある。これは、神の命令によって海の水やその高波が抑えられていることを示している。

²²¹ 『ヨブ記』第38章13節。ここで、「これに」とは夜明けあるいは朝を指し、「悪人」とは暗闇のことである。

²²² 『ヨブ記』第38章14節。ここで、「衣のようにいどころられる」とは、光を受けると大地の山や野がくっきりと現れることを指しているのであろう。前掲書『ヨブ記』（関根正雄訳）の註釈211ページでは、「光が次第に強く加わるとともに野や山もよく見えて」と説明している。

²²³ 『ヨブ記』第38章16節から17節に、「あなたは海の源に行ったことがあるか。淵の底を歩いたことがあるか。死の門はあなたのために開かれたか。あなたは暗黒の門を見たことがあるか」とある。

²²⁴ 『ヨブ記』第38章22節に、「あなたはあは雪の倉にはいったことがあるか」とある。雪を倉に持っているという考えはおもしろい。

²²⁵ 『ヨブ記』第38章22節に、また、「ひょうの倉を見たことがあるか」とある。雹（霰）もまた雪と同様に倉

神の業であると言う。また天空の動き(天の法則)について、「あなたはプレスデスの鎖を結ぶことができるか。オリオンの綱を解くことができるか。あなたは十二宮をその時にしたがって引き出すことができるか。北斗とその子星を導くことができるか。あなたは天の法則を知っているか、そのおきてを地に施すことができるか」²³⁰と迫る。雲に声をかけ、雨を降らせることができるか、稲妻を操ることができるかと問う。神は、「雲に知恵を置き、霧に悟りを与えたのはだれか」²³¹、また「ちりを一つに流れ合わせ、土くれを固まらせることができるか」²³²を言っている。無生物の創造とその世界の運行が神の手の導きにあることが説かれている。

『ヨブ記』第38章39節から第39章においては、動物界のことが神の手によって導かれていると説いている。神は、ヨブに次から次へと問いを發する。すなわち、動物の獅子の子の食欲を満たせるか。さまよえる鴉に餌を与える者はだれか。岩間の山羊の出産を知り得るか。雌鹿の出産を見守ることができるか。出産の時期を知り得るか。誰が野驢馬を自由にしたのか。野牛を上手く使い、畝を行かせ、低地を耕し、僕とすることができるか。次に、駝鳥が無情なのは、神が知恵を授けなかったからであるという²³³。しかし、その駝鳥は、身をおこし走るときには、馬をもその乗り手をも嘲る。次に、馬にその力をあたえることができるか。馬をいなごのように跳ねらせることができるか。戦場においては勇ましく、恐れる

に貯蔵されているという考えは、その当時、一般的であったかどうかは不明である。

²²⁶ 『ヨブ記』第38章28節において、「雨に父があるか」とある。神自身であると言っている。

²²⁷ 『ヨブ記』第38章29節において、「空の霜はだれが生んだか」とある。神自身であると言っている。

²²⁸ 『ヨブ記』第38章28節において、「露の玉はだれが生んだか」とある。実際には、神の業であると言っている。

²²⁹ 『ヨブ記』第38章29節において、「氷はだれの胎からでたか」とある。実際には、神の業であると言っている。

²³⁰ 『ヨブ記』第38章31節から33節。ここで、「結ぶ」と「解く」は星の運行を意味し、「結ぶ」は、縛り付けることを意味し、「解く」は、縛りから解かれると動くことを意味する(関根 正雄訳『ヨブ記』(岩波文庫)の註釈211ページ参照)。またその32節の「十二宮」は、地球から見て太陽が通る道にある十二星座を示し、季節毎に現れる星座が異なるので、「その時にしたがって引き出す」と表現されている(内村鑑三『ヨブ記講演』(第十九講 ヨブの見神)174ページ参照)。

²³¹ 『ヨブ記』第38章26節。この節は、意味の良く理解できない節である。関根正雄訳『ヨブ記』(岩波文庫)では、この節の部分は、「誰が鴉に智慧を与え、おんどりに悟りを授けたか」と訳されている。関根訳ならびに新共同訳の『ヨブ記』では、鴉やおんどりが唐突に現れる感じがする。本稿で使用している日本聖書協会訳『ヨブ記』(38章26節)の方が筋が通っているように思われる。ここでは、正確な意味内容は把握できないとしても、神が雲や霧を支配していることをヨブは言っていると理解しよう。

²³² 『ヨブ記』第38章38節。

²³³ 『ヨブ記』第39章16節から17節に「これはその子に無情であって、あたかも自分の子でないように、その苦勞のむなしくなるをも恐れない。これは神がこれに知恵を授けず、悟りを与えなかったゆえである」とある。ここに駝鳥の話では、駱駝がこのように知恵なく悟りを得ないのは、神がそれらを授けなかったからであると言う。

ことなく、「遠くから戦いをかぎつけ、隊長の大声およびときの声を聞き知る」²³⁴と言う。

7.2 ヨブの沈黙

ヨブは、神に答えて、「見よ、わたしはまことに卑しい者です。なんとあなたに答えようか。ただ手を口に当てるのみです。わたしはすでに一度言いました、また言いません、すでに二度言いました、重ねて申しません」²³⁵と言う。これに対し、神は、「あなたはなお、わたしに責任を負わそうとするのか。あなたはわたしを非とし、自分を是としようとするのか」²³⁶と言い、「あなたは神のような腕を持っているか。神のような声でとどろきわたることができるか」²³⁷と問う。ここで、ヨブが神に責任があると言うのは、神がサタンに命じてヨブを試したと思っているからである。その意味でヨブの苦しみは神に負っている。自身に責任がないにもかかわらず、ヨブは苦しめられている。故に、ヨブは神に訴える。

高慢な者を挫き、悪人を踏みつけ、ちりに埋めて、その顔を獄舎に閉じ込めたなら、「わたしもまた、あなたをほめて、あなたの右の手はあなたを救うことができるとしよう」²³⁸と言う。さらに、河馬²³⁹の話しに繋げ、「これは神の業の第一のもので、これを造った者がこれにつるぎを授けた」²⁴⁰と言う。「だれがかぎでこれを捕らえることができるか。だれがわなでその鼻を貫くことができるか」²⁴¹と言い、神だけができるかのように結んでいる。次に、鱶の話しが展開されている。

7.3 ヨブの悔い改め

既に示したように、ヨブの訴えに対し、神は直接答えるのではなく、神の森羅万象の創造と制御の業をヨブに語り、ヨブの「悔い改め」を促している。『ヨブ記』38章と39章にいて、神は、全知と全能者として自然創造の業と、その支配する力をヨブに示している。それを聞き、ヨブは、神に答えることを放棄している。既に、前項で書き示したように、ヨブは「見よ、わたしはまことに卑しい者です。なんとあなたに答えましょうか。ただ手を口に当てるのみです。わたしはすでに一度言いました、また言いません、

²³⁴ 『ヨブ記』第39章25節からの抜粋。

²³⁵ 『ヨブ記』第40章3節から5節。

²³⁶ 『ヨブ記』第40章8節。

²³⁷ 『ヨブ記』第40章9節。

²³⁸ 『ヨブ記』第40章14節の抜粋。

²³⁹ 『ヨブ記』第40章15節に、「河馬を見よ、これはあなたと同様にわたしが造ったもので、牛のように草を食う」とある。河馬は力強く、その骨は青銅・鉄のようであると言う。

²⁴⁰ 『ヨブ記』第40章19節。

²⁴¹ 『ヨブ記』第40章24節。

すでに二度と言いました、重ねて申しません²⁴²と答えるにすぎない。

ヨブが神について知り得たことは、

(1) 自然界の無生物および生物を創造する神とその支配力

(2) 神に対してヨブ自身の無力さについて無知であったことの知

それまでのヨブは自身が無知であることについて無知であった。

ヨブの「悔い改め」は、以下のものであった。

「わたしは知ります、あなたはすべての事をなすことができ、またいかなるおぼしめしでも、あなたはできないことはないことを。『無知をもって神のはかりごとをおおうこの者はだれか』。

それゆえ、わたしはみずから悟らないことを言い、みずから知らない、測りがたいことを述べた。『聞け、わたしは語ろう、わたしはあなたに尋ねる、わたしに答えよ。』

わたしはあなたのことを耳で聞いていましたが、今はわたしの目であなたを拝見いたします。それでわたしはみずから恨み、ちり灰の中で悔います²⁴³。

ここで、ヨブは、神に直接向かい、神の全知ならびに全能を認め、自己の罪を懺悔することを神に語っている。ヨブは、自ら測り難い事(多分、奇跡など)について語ったことを悔いているのであろう。実際、ヨブは、今、みずから恨み、ちり灰の中で悔いていると言っているが、これは、自己を捨て、自己を否定し、神にまかせることを意味している。ヨブは、神に懺悔し、神を疑ったことを悔い改めた。

7.4 神は「ヨブを全き人」として受け入れる

神に会って直接、自己の罪を懺悔し、自分を捨て、神に自身をまかせるようになったヨブを神は、全き人として受け入れた。神は、ヨブが正しい事を神について述べた、と言っている。故に、神は、ヨブの祈りを受け入れる、と言っている。

神は、神自身の怒りをデマン人エリバズなどの三友人に向けると言う。それは、ヨブのように「正しい」ことを神に語らなかったからであると言う。「わたしは彼の祈りを受け入れる」²⁴⁴、よって「あなたがたの愚かを罰することをしない」。

²⁴² 『ヨブ記』第40章4節から5節。

²⁴³ 『ヨブ記』第42章1節から6節。

²⁴⁴ 『ヨブ記』第42章8節、749ページ上段を参照。

むすびにかえて

本稿では、戦士ヨブの神との応酬を通して、自身の無知を知り、義人ヨブが悔い改めることを見た。それと併せて、義人ヨブの潔白の誓いを今日の経済学理論の分析において前提とされる個人の倫理と個人の行為が戦士ヨブのような義人の倫理や行為と整合することを考察し、その行動の簡単なフレームワークについても考察・検討した。これが本稿の第一の問題(課題)である。今日の経済学で示されている、効用関数、さらに予算制約のもとでの個人の行動が戦士ヨブの倫理行為とどのように関連しているかを考察し検討した。

本稿の第二の問題は、エラスムスの『エンキリディオ』(『戦うキリスト者の短剣』, あるいは『キリスト教兵士提要』)における教則(第一から二十二の教則)を参考にして、あるいは『聖書』からの引用によって、義人ヨブの「悔い改め」を確認し、明らかにした。

本稿では、第1節において、義人ヨブという人物の財産、社会的地位、幸せな家族関係を簡単に紹介し、第2節では、義人ヨブの試練(第一の試練、第二の試練、そしてヨブ自身が病に罹患する第三の試練)を概観し、その試練がサタンによる神への問題提起によることを確認した。第3節では、義人ヨブの嘆きと彼の三友人の慰め、さらにヨブとの第一の応答ではヨブの苦しみが三友人にどのように理解されているかを示した。第4節では、義人ヨブの三友人に対する反撃とヨブに対する呼びかけについてみる。第5節では、ヨブの確信では、ヨブが潔白であることを見る。第6節では、「ヨブの潔白な誓い」について紹介し、さらにその誓いを今日の経済学の立場から解説を行い、ヨブによって提示されている「倫理問題」がどのように経済学で扱われうるかを考察・検討した。今日の経済学との比較では、消費者行動に関する考察では、ヨブの倫理や行為と今日の消費者行動は整合する点が多数あることを示した。ただ、生産者の行動については、今日の生産者(企業者)の行動とヨブの時代の生産者(遊牧民の首長、あるいは家族長)の行動には相違点が多いと思われる。

第7節では、戦士ヨブと神との応酬、さらにヨブの悔い改めについて説明した。

引用文献

- (1) 浅野 順一 著 『ヨブ記 —その今日への意義—』(岩波新書, 1968)
- (2) 内村鑑三 著 『ヨブ記講演』(岩波文庫, 2015)
- (3) 日本聖書協会編 訳 『聖書』(日本聖書教会, 1968)
- (4) 日本聖書協会編 訳 『ヨブ記』(『聖書』42章, 697-749 ページ)(日本聖書協会, 1968)
日本聖書協会編・新共同訳 『ヨブ記』(『聖書』42章, 775-833 ページ)(日本聖書協会, 1991)
- (5) 関根 政雄 訳 『ヨブ記』(岩波文庫, 1971)
- (6) デジデリウス・エラスムス著(金子 晴勇訳)『エンキリディオ』(1504年)(『宗教改革著作集』第2巻(5ページから180ページ)に収録された『エンキリディオ』を使用)(教文館, 1989年)

参考文献

- (1) W. M. Gorman, 'Separability Utility and Aggregation', *Econometrica*, 27, pp.469-481, 1959.
- (2) W. M. Gorman, 'Conditions for additive separability', *Econometrica*, 39, pp.605-608, 1968.
- (3) J. Koopmans, 'Stationary Ordinal Utility and Impatience', *Econometrica*, 28, pp.287-308, 1968.
- (4) M. Morishima & Others, *Theory of Demand — Real and Monetary—* (Oxford, 1973)
- (5) R. H. Strotz, 'Myopia and Inconsistency in Dynamic Utility Maximisation', *Review of Economic Studies*, 23, pp.543-559, 1955-1956.
- (6) R. H. Strotz, 'The Empirical Implications of A Utility Tree', *Econometrica*, 25, pp.269-280, 1957.
- (7) R. H. Strotz, 'Utility Tree', *Econometrica*, 27, pp.482-488, 1959.

(くぼた よしひろ マクロ経済学・金融論)